

みなみ なか ぼる
南 中 原 第 1 遺 跡 (一次)

Minaminakabaru 1 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書54

2 0 0 7

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載した南中原第1遺跡は、平成16年度から平成17年度にかけて発掘調査を行い、後期旧石器時代の打製石斧、縄文時代早・後・晩期の集石遺構・土坑などの遺構、縄文土器や石鏃・石斧・石錘・敲石等の石器が、縄文時代以降では古代の土師器・須恵器等の遺物が、そして第二次世界大戦時の高鍋町の情勢を物語る防空壕と認識票が確認できました。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びにご指導・ご助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成19年7月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉

凡 例

- 1 本書は、平成16年度～平成17年度に実施した東九州自動車道（都農～西都間）建設に係る南中原第1遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社となったが、本報告書中では日本道路公団として記載する。
- 3 現地での実測・写真撮影等の記録は、永田和久、重留康宏、堀口悟史、土谷崇夫が行い、一部について発掘作業員が補助した。
- 4 整理作業は、遺物洗浄、注記、接合・実測及びトレース、遺構埋土のフローテーションを宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・遺物実測及びトレースは堀口が行ったほか整理作業員が補助した。一部石器実測は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。フローテーションは整理作業員の協力を得て行ったが、埋土中に炭化物等が乏しく、十分な結果は出せなかった。
- 5 本書で使用した遺物写真は堀口が撮影した。
- 6 調査区の座標設置及びグリッドの設定は、有限会社黒木測量コンサルタントに委託した。
- 7 空中写真撮影は、九州航空株式会社に委託した。
- 8 本報告書で使用する略号は次のとおりである。

SI=集石遺構 SC=土坑 SE=溝状遺構 SH=ピット
- 9 本書で使用した位置図は国土地理院発行の2万5千分の1図をもとに、遺跡周辺地形図等は、日本道路公団宮崎工事事務所から提供の1,000分の1図をもとに作成した。
- 10 本書で使用した方位は主に磁北（M.N.）である。また、標高は海拔絶対高である。
- 11 国土座標は、改訂前の旧平面直角座標系Ⅱ（世界測地形）である。
- 12 土器及び土層の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準拠した。
- 13 本書の遺構及び遺物実測の縮尺は明記してあるが、主なものについては以下のように統一している。

集石遺構…1/20 土坑…1/30 溝状遺構…1/80 土器類…1/3
石鏃…2/3 スクレイパー・礫器…1/2 石斧…1/2 台石・磨石・敲石…1/3
石核…1/2・1/3 認識票…1/1
- 14 本書の執筆と編集は、堀口が担当した。
- 15 出土遺物、その他の諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第Ⅱ章	遺跡の環境	2
第Ⅲ章	調査の経過と方針	4
第1節	確認調査の概要	4
第2節	発掘調査の方法	5
第3節	整理作業及び報告書作成	6
第Ⅳ章	調査の記録	8
第1節	基本層序	8
第2節	旧石器時代の遺物	10
第3節	縄文時代の遺構と遺物	11
第4節	古代の遺構と遺物	36
第5節	近現代の遺構と遺物	37
第6節	その他の遺構	39
第Ⅴ章	まとめ	40

挿図目次

第1図	遺跡位置図	3	第19図	包含層出土土器実測図 2	24
第2図	確認調査トレンチ配置図	4	第20図	包含層出土土器実測図 3	25
第3図	周辺地形図	7	第21図	包含層出土土器実測図 4	26
第4図	調査区グリッド配置図	7	第22図	圧痕土器実測図	27
第5図	T1・4土層断面図	9	第23図	包含層出土石器実測図 1	28
第6図	旧石器時代調査トレンチ配置図	10	第24図	包含層出土石器実測図 2	29
第7図	旧石器時代出土遺物実測図	10	第25図	包含層出土石器実測図 3	30
第8図	遺構分布図	12	第26図	包含層出土石器実測図 4	31
第9図	集石遺構実測図 1	14	第27図	包含層出土石器実測図 5	32
第10図	集石遺構実測図 2	15	第28図	包含層出土石器実測図 6	33
第11図	集石遺構実測図 3	16	第29図	包含層出土石器実測図 7	34
第12図	土坑実測図 1	17	第30図	包含層出土石器実測図 8	35
第13図	土坑実測図 2	18	第31図	古代ピット及び出土遺物実測図	36
第14図	SC11及び出土遺物実測図	18	第32図	包含層出土土器実測図	36
第15図	SC12及び出土遺物実測図	19	第33図	防空壕・土坑位置図	37
第16図	SC17及び出土遺物実測図	20	第34図	認識票実測図	38
第17図	包含層出土土器・石器分布図	22	第35図	SE1・2実測図・断面実測図	39
第18図	包含層出土土器実測図 1	23			

表目次

第1表	基本層序	8	第5表	古代土器観察表	43
第2表	集石遺構・散礫観察表	13	第6表	旧石器時代・縄文時代石器計測表1	44
第3表	縄文土器観察表1	42	第7表	旧石器時代・縄文時代石器計測表2	45
第4表	縄文土器観察表2	43			

挿入写真目次

写真1	60圧痕位置	27	写真4	61圧痕位置	27
写真2	60圧痕拡大状況	27	写真5	防空壕検出状況(東から)	37
写真3	60電子顕微鏡による圧痕拡大状況	27	写真6	防空壕内部	37

図版目次

図版1	調査区を南から撮影	47	図版5	SC11・12出土遺物	51
	調査区俯瞰			SC12出土縄文土器	
図版2	調査区近景(南から)	48		SC17出土遺物	
	T4土層断面			SC17出土縄文土器	
	T1土層断面			包含層出土縄文土器(1)	
	SI4検出状況(北から)			包含層出土縄文土器(2)	
	SI5検出状況(北から)			包含層出土縄文土器(3)	
	SI6検出状況(北から)			包含層出土縄文土器(4)	
	SI7検出状況(北から)		図版6	包含層出土縄文土器(5)	52
	SI8検出状況(北から)			包含層出土縄文土器(6)	
図版3	SI10検出状況(北から)	49		圧痕土器	
	SI6半截状況(南東から)			包含層出土石器(1)	
	SC4完掘状況(西から)			包含層出土石器(2)	
	SI11・12・13検出状況(北から)			包含層出土石器(3)	
	SI13配石(東から)			包含層出土石器(4)	
	SI2半截状況(東から)			包含層出土石器(5)	
	SC11完掘状況(南から)		図版7	包含層出土石器(6)	53
	SC12半截状況(南から)			包含層出土石器(7)	
図版4	SC12完掘状況(南から)	50		包含層出土石器(8)	
	SC17完掘状況(南から)			包含層出土石器(9)	
	SE2完掘状況(東から)			包含層出土石器(10)	
	SE1完掘状況(東から)			包含層出土古代土器(1)	
	自然流路断面(東から)			包含層出土古代土器(2)	
	自然流路完掘状況(東から)			認識票	
	防空壕天井除去後の状況				
	旧石器時代出土遺物				

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西都間）は、平成元年 2 月に基本計画がなされ、平成 9 年 3 月には整備計画路線となっている。さらに、平成 9 年 12 月に建設大臣から日本道路公団へ施行命令が出され、公団では翌年の 2 月から事業に着手している。その間、県教育委員会では、平成 6 年度に延岡～西都間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響が出る部分については工事着手前に、発掘調査を実施することとなった。調査は、平成 11 年度から県教育委員会が日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。

南中原第 1 遺跡は、平成 13 年度、15 年度、16 年度と三度にわたり確認調査を行い、平成 17 年 1 月 5 日より本調査に着手し、平成 17 年 12 月 22 日に終了し、整理作業は平成 18 年 1 月より行った。

第 2 節 調査の組織

南中原第 1 遺跡の調査・整理組織は以下のとおりである。

調査主体宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター
所長

矢野 剛（平成 13 年度）
米良弘康（平成 15 年度）
宮園淳一（平成 16～17 年度）
清野 勉（平成 18～19 年度）

副所長

加藤悟郎（平成 18～19 年度）

副所長兼総務課長

菊池茂仁（平成 13 年度）
大藪和博（平成 15～16 年度）

副所長兼調査第二課長

岩永哲夫（平成 13～18 年度）

総務課長

宮越 尊（平成 17～19 年度）

調査第一課長

面高哲郎（平成 13 年度）
児玉章則（平成 15 年度）
高山富雄（平成 16～18 年度）
長津宗重（平成 19 年度）

総務課総務係長

亀井維子（平成 13 年度）

主幹兼総務課総務係長

石川恵史（平成 15～17 年度）

主幹兼総務担当リーダー

高山正信（平成 18～19 年度）

調査第一係長

谷口武範（平成 13～16 年度）

主幹兼調査第一係長

長津宗重（平成 17 年度）

主幹兼調査第一担当リーダー

長津宗重（平成 18 年度）

調査第二係長

長津宗重（平成 13～16 年度）

主幹兼調査第二担当リーダー

菅付和樹（平成 18～19 年度）

（確認調査担当）

主査 山田洋一郎（平成 13 年度）

主査 永野高行（平成 15 年度）

調査員（嘱託） 黒木 修（平成 15 年度）

主事 小宇都あずさ（平成 16 年度）

（本調査担当）

主査 永田和久

主査 小川太志

主事 重留康宏

主事 堀口悟史

調査員（嘱託） 土谷崇夫

（報告書作成担当）

主事 堀口悟史

調査指導（敬称略）

泉 拓良（京都大学）

小畑弘己（熊本大学）

田崎博之（愛媛大学）

広瀬和雄（国立歴史民俗博物館）

本田道輝（鹿児島大学）

柳沢一男（宮崎大学）

第Ⅱ章 遺跡の環境

(1) 地理的環境

南中原第1遺跡は、宮崎県児湯郡高鍋町大字上江字北中原に所在する。

本遺跡が位置する高鍋町は、宮崎平野の北端部に位置し、新世代第四紀洪積世に形成された河岸・海岸段丘が広がっている。東は日向灘に面し、西は茶臼原台地で木城町と接し、北は川南原台地で川南町へ、南は水谷原台地で新富町へ続いている。これらの台地上には、起伏が緩やかな平野が広がり、畑地と集落が点在する。町内は九州山地に源を発する小丸川と茶臼原付近の山間を水源とする宮田川が東流し、日向灘に注いでいる。

本遺跡は、小丸川南岸に広がる牛牧台地北部縁辺の東向き斜面に位置し、標高は海拔約36～55mである。牛牧台地は、宮崎平野北部の段丘群中の三財原面に相当し、数多くの遺跡が所在する。本遺跡の南には、竹林を挟んで老瀬坂上第3遺跡が、北には林を挟んで野首第2遺跡、野首第1遺跡が所在する。

(2) 歴史的環境

本遺跡の周辺では、数多くの発掘調査が実施されているほか、古墳や中世館跡といった史跡が所在する。それらのうち、本遺跡と関連がある時代の遺跡を中心に概要を紹介する(第1図)。

後期旧石器時代として、持田中尾遺跡では横長剥片を素材とするナイフ形石器・角錐状石器・日東産黒曜石製の円形搔器等が出土している。また妻道南遺跡では、日東産黒曜石製のナイフ形石器が一点出土している。

縄文時代として、耳截遺跡では手向山式土器が出土している。妻道南遺跡では早期の集石遺構が5基検出され、貝殻条痕文土器、押型文土器、石鏃が出土している。大戸ノ口第2遺跡では集石遺構が約45基検出され、円筒形貝殻文土器、押型文土器、塞ノ神式土器、船元式系土器、石斧、円形搔器等が出土している。

弥生時代として、持田中尾遺跡では竪穴住居跡2軒などが検出され、下城式系の甕をはじめ壺形・鉢形の土器、磨製石鏃・石剣・石庖丁・磨製石斧・打

製石斧・打欠石錘・砥石などが出土した。大戸ノ口第2遺跡では前期の土坑と後期の竪穴住居跡12軒などが検出され、下城式の甕、瀬戸内系の壺片、高坏等が出土した。

古墳時代以降では、周辺に数多くの古墳がみられる。北側対岸の台地に国史跡川南古墳群が、東側対岸の台地に国史跡持田古墳群がある。北西の台地斜面には老瀬横穴墓群がある。

近代、第二次世界大戦時中においては、米軍の宮崎上陸に備え、海岸線の要所を堅固に防衛するために有力な部隊を水際に配置した。上江地区にも谷間や山陰に急造の山小屋兵舎が建てられ、機関銃座や待避壕が数多く作られ、牛牧には砲兵隊が砲座をもうけていた。

【参考文献】

「持田中尾遺跡発掘調査概要報告書」

1982 高鍋町教育委員会

「妻道南遺跡発掘調査報告書」

1986 高鍋町教育委員会

高鍋町史 1987 高鍋町

高鍋町文化財調査報告書 第6集

町内遺跡発掘調査報告書「老瀬坂上第2遺跡」

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第76集

「東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ」2003

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集

「野首第1遺跡」2004

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第91集

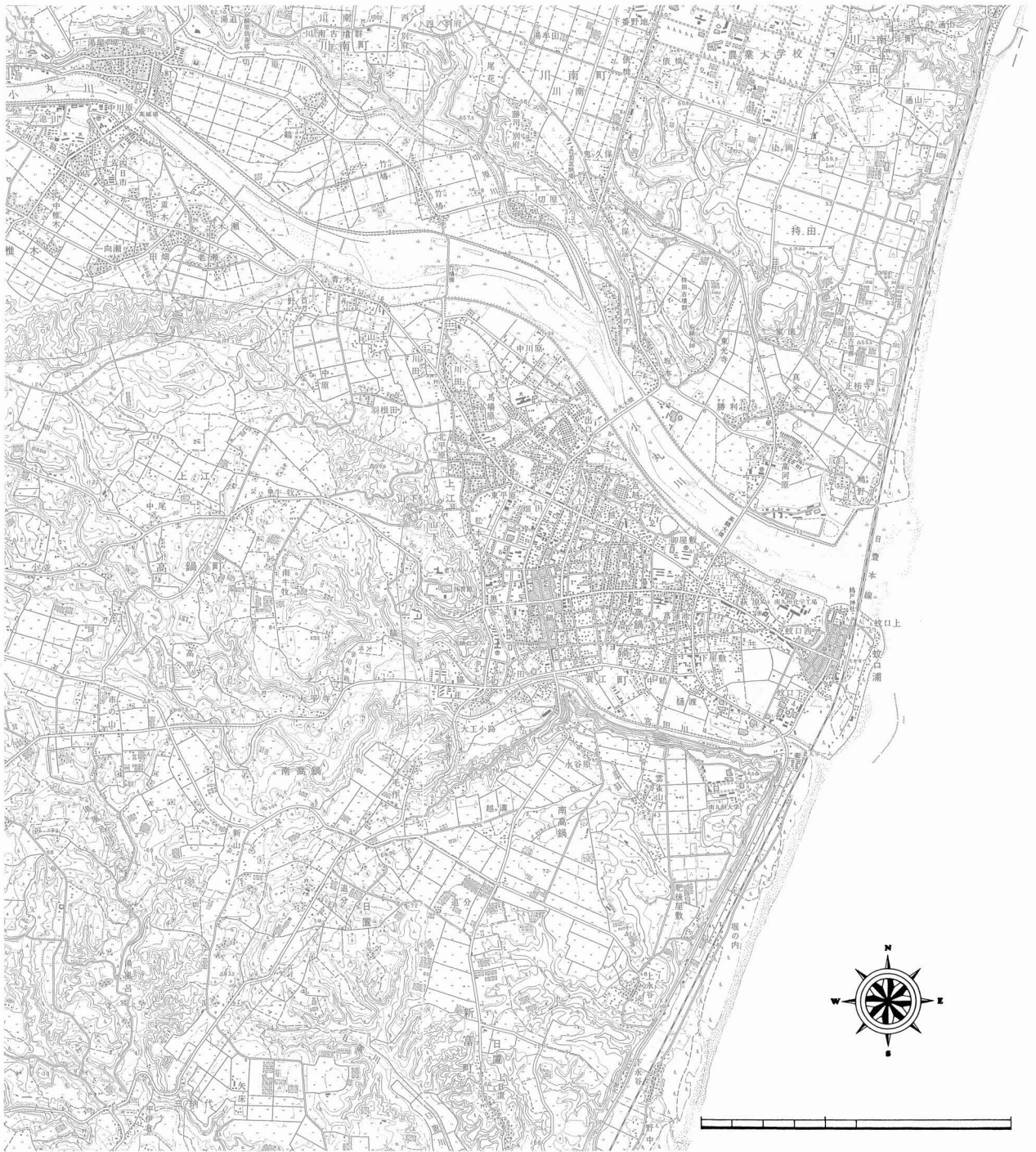
「東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ」2004

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第111集

「東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅴ」2005

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第131集

「東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅵ」2006



第1図 遺跡位置図 (S= 1/50,000)

第三章 調査の経過と方針

第1節 確認調査の概要

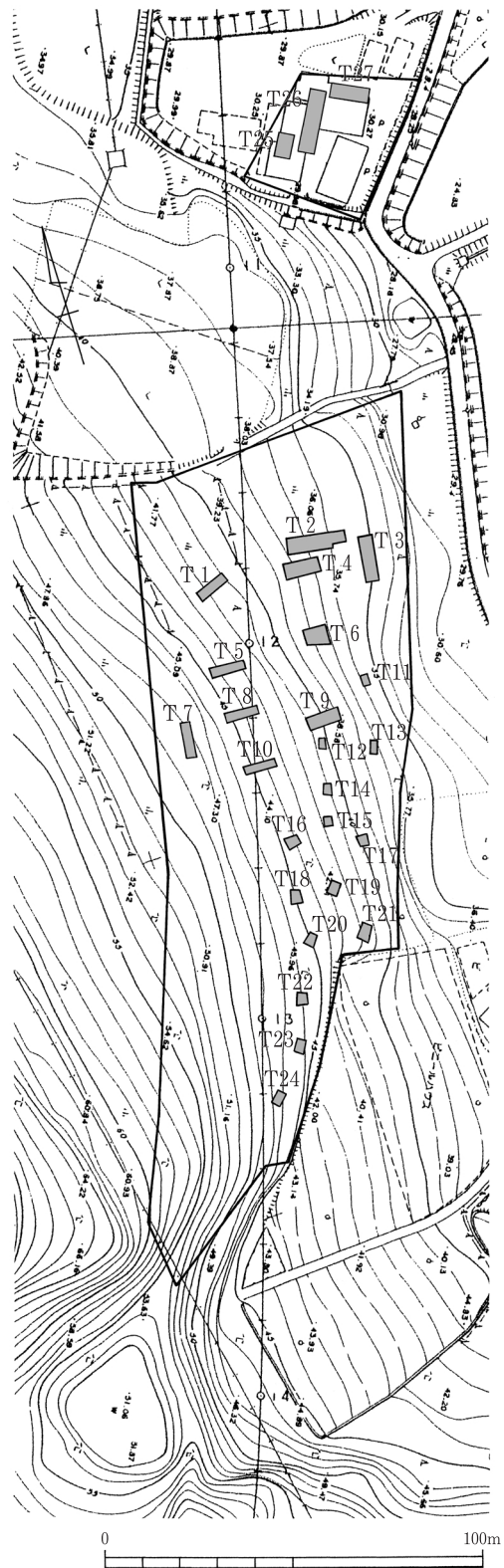
本遺跡は三度に分け、確認調査を行った。一次確認調査は、平成14年2月26日～同年3月28日まで、6,871㎡を対象面積として、二次確認調査は、平成15年5月6日～同年6月23日まで、4,400㎡を対象として、三次確認調査は、平成16年5月24日～同年6月30日まで2,650㎡を対象として行った。

一次確認調査では、トレンチを2m×10mから2m×12mと設定し、10箇所(T1～10)を調査した(第2図)。全てのトレンチからⅡ層の黒色土(クロボク)が確認でき、Ⅲ層のK-Ahは、T7とT8で確認できたのみであった。Ⅳ層とⅤ層は、野首第2遺跡のⅡ層とⅢ層に相当する。遺構はⅥ層上面において、土坑とピットを確認でき、遺物では、Ⅱ層より縄文時代後期・晩期にあたる貝殻条痕文土器・孔列文土器・打製石斧・二次加工剥片等が出土した。

二次確認調査では、トレンチを14箇所設定した。T22～24でのみK-Ahを確認することができ、T12～18では、黒褐色土、黒色土(クロボク)、MB0、ML1を確認した。遺構では、T19・23・24のⅥ層より集石遺構、T20のⅣa層上面より土坑を検出した。遺物では、T16・21・23・24より縄文時代早期の土器片が、T11・12・13・14・15・17のⅢ層より縄文時代後・晩期の土器片、弥生土器片、土師器片、石斧、敲石、剥片他が出土した。また、T22からは第二次世界大戦期の認識票も出土した。

三次確認調査は、北側のやや緩やかな箇所を挟んだ宅地跡にトレンチを3箇所(T25～27)設定した。大規模な削平を受けており、どのトレンチも表土直下に礫層が確認され、遺構遺物ともに検出されなかったため調査対象から除外した。

以上の結果から、縄文時代後・晩期より中世の遺構・遺物を包含する黒色土層(クロボク)、縄文時代早期に該当する黒褐色～褐色ローム層(MB0～ML1)を文化層として全面調査とその下層もトレンチ調査することに決定し、東九州自動車道路線内で調査可能な範囲12,050㎡を調査対象面積とした。



第2図 確認調査トレンチ配置図 (S=1/2,000)

第2節 発掘調査の方法

本調査は、平成17年1月5日から平成17年12月22日まで実施した。

重機による表土剥ぎを行った後、調査区に、国土座標に基づく10m×10mの大グリッドを設定した。このグリッドは包含層の精査・掘削、遺物の取り上げ、図面作成、その後の整理、報告まで活用した。グリッドNo.は、南北に南から1～18、東西に西からA～Lで組み合わせた杭No.を用いた。

調査では調査区をA～C区と三分割し、調査区南部に当たるA区から北西部のB区、北東部のC区の順で調査を行った。遺物は全て光波トランシットによる点上げとし、遺構及び平面図も光波トランシットで測定し、遺構分布図を作成した。コンタは50cm間隔で計測した。

MB0までの包含層はトレンチで確認した後、手鋏とネジリ鎌で掘削を行い、遺構・遺物が見込めない層は重機により掘削した。ML1下はA区では、トレンチを設定しXI層（イワオコシスコリア）と一部XV層（礫層）まで下げて確認した。なおB区の大半の部分とC区においては礫層まで浅く、後期旧石器時代の遺構・遺物はないと判断した。

また、C区東部はトレンチを数箇所設定したが、どのトレンチでも造成土が厚く、遺物もあまり見られなかったため、また排土置場を斜面の上位に設定せざるを得ず、安全の面からも調査は行わなかった。（日誌抄）

【平成17年1月5日～13日】

ブッシュチョッパーによる草竹等刈り払いを行い、道・事務所・休憩所・駐車場を設置。

【1月14日～25日】

表土剥ぎを行いながら、調査区に生える竹根を除去した。調査区西側は杉の植林に伴う造成土が厚い。

【1月26日～2月16日】

排土搬出を行った。調査区南部東端に重機でトレンチを設置し、土層の確認を行う。調査区南端は包含層が大部分流出していたが、残りの区域に関しては、二次堆積 K-Ah、K-Ah、MB0とも良好に残存していたが、AT等は確認できず。

【2月17日～3月11日】

調査区西端にトレンチを設定し、二次堆積 K-Ah、K-Ahの残存を確認した。MB0やML1より礫は検出されるが集石遺構の確認はできなかった。排土流出防止用としてコンパネ壁を設置。

【3月14日～30日】

K-Ah、MB0の掘り下げを行い、散礫及び集石遺構が6基検出された。検出面より薄手無文土器が出土していることから、集石遺構は縄文時代早期初頭に該当すると想定される。

【4月7日～21日】

集石遺構及び散礫の写真撮影・実測を行い、併行して重機で調査区南西部の表土剥ぎを行った。

【4月22日～5月13日】

発掘作業員による調査区南部のMB0掘削を行い、集石遺構、土坑等を検出した。南部東端に設定したトレンチを写真撮影・分層・実測を行った。

【5月16日～30日】

排土量の増加が想定されるので補強のため、コンパネ壁の杭を丸太杭に打ち替える。MB0下部を掘削、集石遺構を検出し、撮影・実測を行った。

【6月1日～13日】

南部の精査を行い、土坑10基とピットを検出した。B区西部にトレンチを設定し土層を確認した。K-Ah・MB0が確認できず、一部自然流路と思われる箇所が見られた。

【6月14日】

グリッド杭打ち作業（委託）を行った。

【6月15日～27日】

A区にML1下を確認するトレンチを設置し、掘り下げを行った。トランシットによる散礫実測、遺物点上げを行った。

【6月28日～7月11日】

排土搬出（委託）を行い、野首第2遺跡へ排土を移動。

【7月19日～28日】

重機によるB区の表土剥ぎを行った後、黒褐色土を掘削。防空壕を検出した。

【8月11日】

高鍋中央公民館歴史講座で町民46人が発掘調査の見学を訪れた。

【8月22日】

高鍋町教育委員会社会教育課・壺岐氏と山本氏が訪れた。防空壕を確認し、位置を押さえ写真で記録した後、埋め戻した。

【8月26日】

光波トランシットを使用し、B区にグリッド杭を打ちこむ作業を行った。

【9月7日】

台風14号により、調査区脇道に敷いたクラッシュラン及び、駐車場近くの区画が崩落し土砂が町道に流出し、後処理を行った。

【9月9日～16日】

排土搬出を行った。B区精査を行うも、集石遺構・散礫は確認できず、土坑5基を確認。遺物も縄文時代後・晩期と思われるものが多い。

【10月3日～6日】

C区の表土剥きを重機で行った。C区西部にトレンチを設定し、掘削したが造成土が厚く、また大部分削平を受けていたため、調査から除外した。

【10月12日～11月4日】

C区の黒褐色土層を掘削。溝状遺構、自然流路を検出・撮影。

【11月7日～8日】

高鍋西小学校の児童が理科校外学習で訪れる。

【11月15日～18日】

C区の精査を行う。土坑3基を検出・撮影・実測。

【11月25日】

空中写真撮影を行う。

【12月2日】

排土運搬を行う。調査区北端にトレンチを設定し、ML1下を確認。

【12月15日】

器材等の運搬。現場事務所・作業員休憩棟の清掃。

【12月16日】

現場事務所等撤去。

【12月22日】

発掘調査を終了。

高鍋町内遺跡調査報告会

【平成18年3月18日】

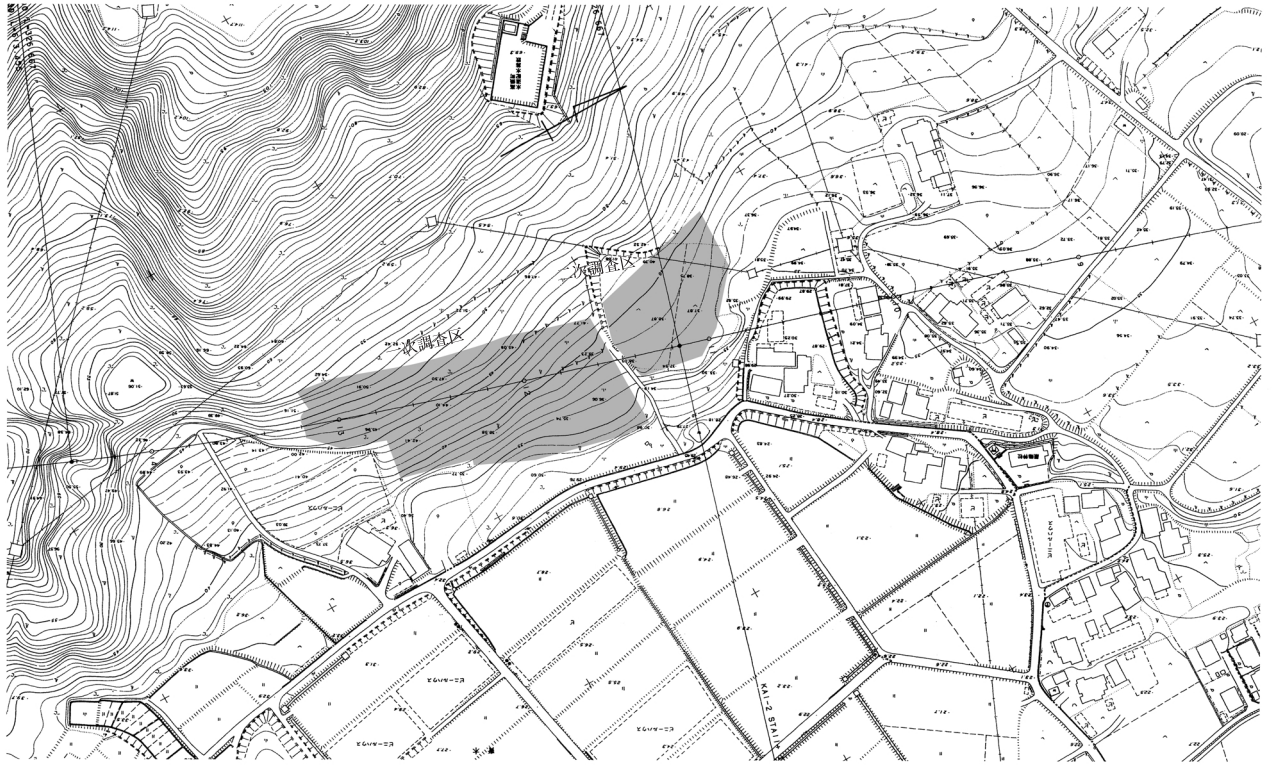
高鍋町中央公民館にて報告会を開催し、高鍋町内を中心に86名が参加した。本遺跡の調査結果の報告と高鍋町の縄文時代をテーマとした発表を行った。



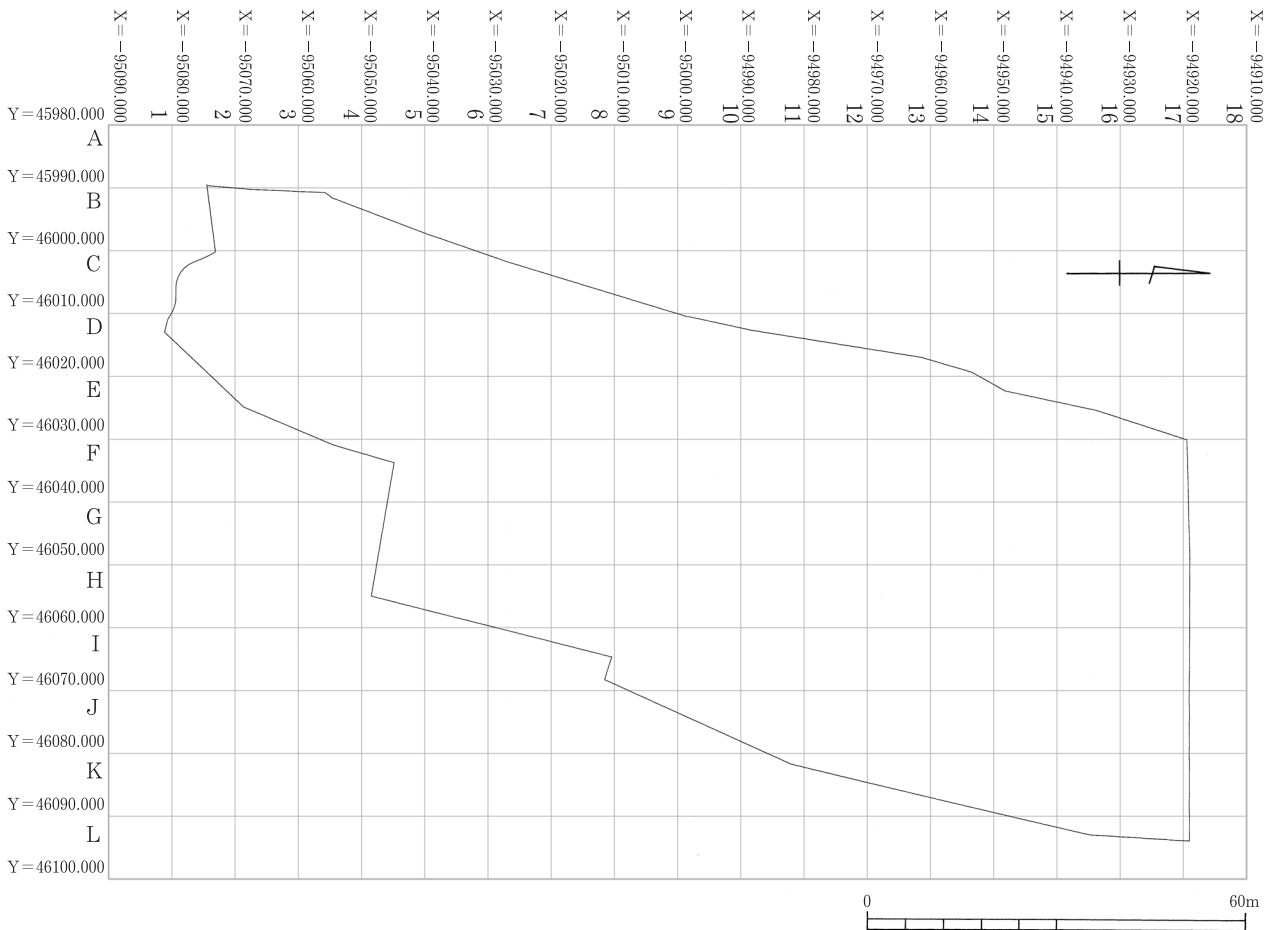
報告会の様子

第3節 整理作業及び報告書作成

平成18年1月から埋蔵文化財センター本館において整理作業を開始した。1月より3月まで遺物の洗浄・注記・接合・計測を行った。4月からは遺物の実測・拓本を行い、7月より遺構・遺物のトレースを実施した。なお、報告書に使用している一部の遺物実測図は、トレースくん(アイシン精機)でトレースを行った。また本遺跡では縄文時代後・晩期の遺物が出土した土坑の埋土を持ち帰り、種子や炭化物等を選別するフローテーション作業を行ったが、分析を依頼するに足る結果を出すことはできなかった。



第3図 周辺地形図 (S=1/4,000)



第4図 調査区グリッド配置図 (S=1/1,200)

第IV章 調査の記録

第1節 基本層序

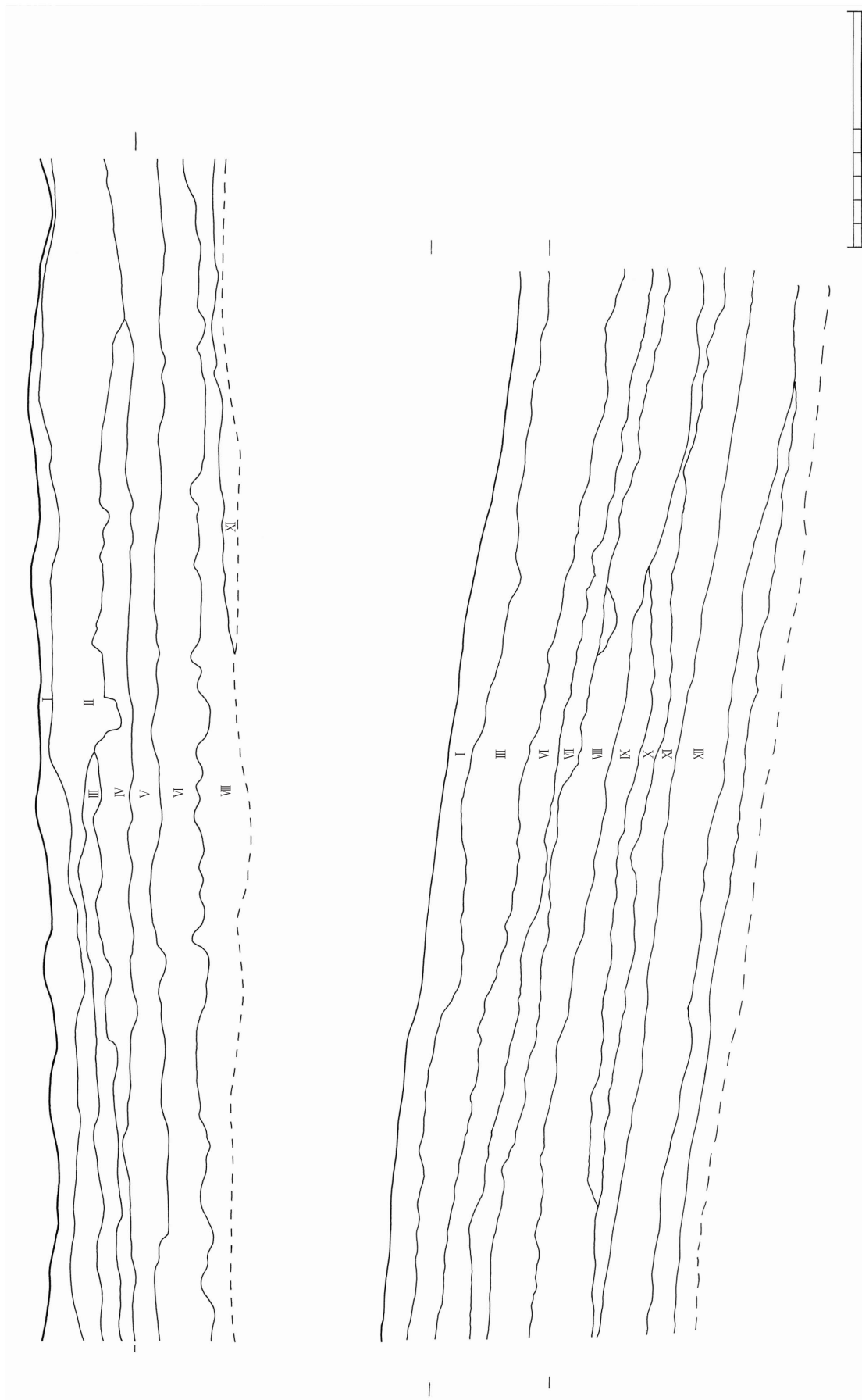
南中原第1遺跡における基本層序は次の通りである。基本層序は調査区南部に設定したT4と調査区北端に設定したT1の土層を参考にした(第6図)。層序は調査区内で一定ではなく、南部ではVIa層上が良好に堆積しているが、北部へと標高が低くなるにつれ、IVa・b層やV層がまばらになり、T3ではいずれも確認できない。また西から東へ斜面を下るにつれIVa層以下が薄くなり、T2では完全に消失してVIa層下は礫層となる。調査区東端は削平と造成の影響でVIa層上は確認できなかった。

Kr-KbはA区でまばらに見られるが、層としては認識できず、VIa層中に含むこととした。

またATもわずかに粒が残る程度で層として確認することはできなかったのでVIII層に含むこととしたが、土石流跡とみられる段丘礫集中区北側に設定したT1ではKr-KbとATが良好に残存しているため、単独層とした。なおKr-KbとATは平成18年度に調査を開始した調査区北に隣接する二次調査区でも確認することができた。

- I層 : 表土 枯葉等を多く含む腐葉土。
- II層 : 造成土 土器の細片から現代のガラス片等を含む。
- III層 : 黒色土層(10YR2/2) 粘性、しまりともあまりなく、サラサラしている。A区北半からB・C区にかけて堆積している。縄文時代後期から古代までの遺構・遺物を内包する。
- IVa層 : 明黄褐色土層(10YR3/1) 二次堆積 K-Ah層。粘性があり、しまりはあまりない。3mm以下の明黄褐色粒を多量に含む。A・B区共に一部でしか確認できず、調査区北側では確認できなかった。
- IVb層 : 明黄褐色土層(10YR6/6) K-Ah層。しまりはなくサラサラしている。1mm程度の白色粒を含む。主にA区全面とB区南西側に良好に堆積していた。斜面を下るにつれて層厚は薄くなり、B区中部では全く残存していなかった。
- V層 : 黒褐色土層(10YR3/2) 粘性はあまりなく、やや固くしまっている。A区中部からB・C区南にかけて残存していた。縄文時代早期の遺構・遺物を内包する。
- VIa層 : 褐色土層(10YR4/4) 粘性があり、固くしまっている。ML1とKr-Kbに相当する。層の下部に5mm以下の黄褐色粒(Kr-Kb)をわずかに含むが、層として区別できないため、Kr-Kbを含むML1層をVIa層とする。B区の段丘礫集中区手前まで堆積している。
- VIb層 : 褐色土層(10YR4/4) 粘性があり、固くしまっている。ML1に相当する。調査区北部の段丘礫集中区の北側ではKr-Kbと明確に分けることができたため、ML1のみの層をVIb層とする。
- VII層 : 褐色土層(10YR4/3) 粘性があり、固くしまっている。5mm以下の黄褐色粒(Kr-Kb)を含む。VII層が確認できたのはB区の段丘礫集中区より北のみであった。
- VIIIa層 : 暗褐色土層(10YR3/4) やや粘性があり、やや固くしまっている。3mm以下の黄褐色粒(AT)をわずかに含む。B区の段丘礫集中区南まで堆積し、ATを層として区別することができないためAT粒を含む暗褐色土層をVIIIa層とする。
- VIIIb層 : 暗褐色土層(3/4) やや粘性があり、やや固くしまっている。段丘礫集中区より北側ではATが層として堆積しているため、暗褐色土層のみをVIIIb層とする。
- IX層 : 褐色土層(7.5YR4/6) 粘性はあまりなく、やや固くしまっている。AT火山灰堆積層で、VII層と同じく段丘礫集中区より北で確認できた。
- X層 : にぶい黄褐色土層(10YR5/4) 粘性はあまりなく、非常に固くしまっている。1mm以下の白色粒をわずかに含む。MB3に相当する層であると思われる。主に調査区の西側で確認できた。
- XI層 : 明褐色土層(7.5YR5/6) 粘性があり、やや固くしまっている。明黄褐色粒を多量に含み、イワオコシスコリアブロックをまばらに確認できた。
- XII層 : 明黄褐色土(10YR6/6) 粘性はなく、非常に固くしまっている。イワオコシスコリア層。A区とB区の西側で確認できた。
- XIII層 : にぶい黄褐色土(10YR5/3) 非常に粘性があり、しまりはない。1cm以下の砂利を多量に含む。
- XIV層 : 砂礫層 卵大から人頭大ほどの段丘礫を含む。礫間は粘質の土と砂利で構成されている。

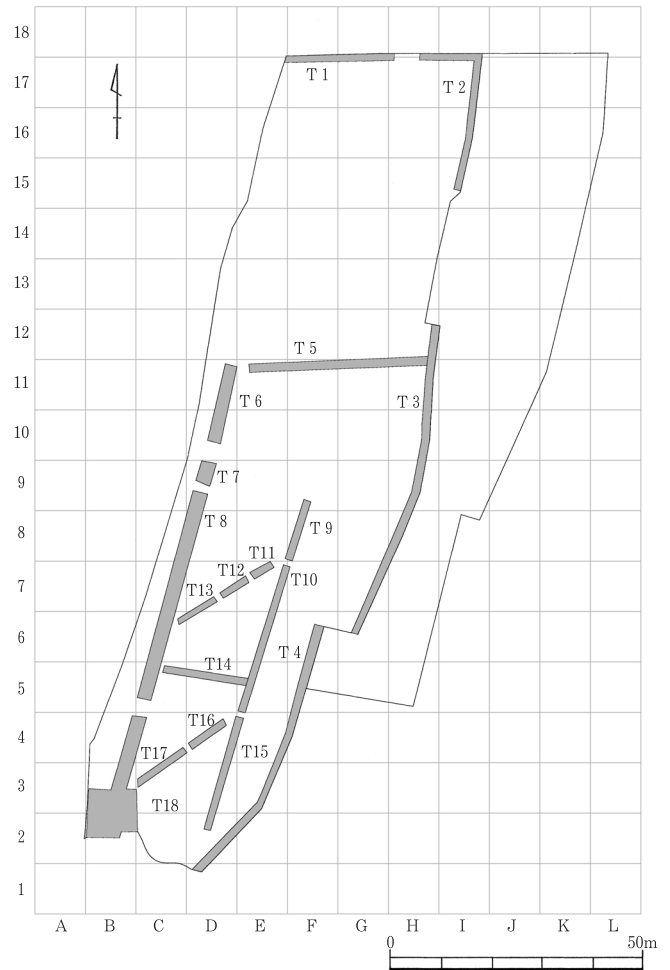
第1表 基本層序



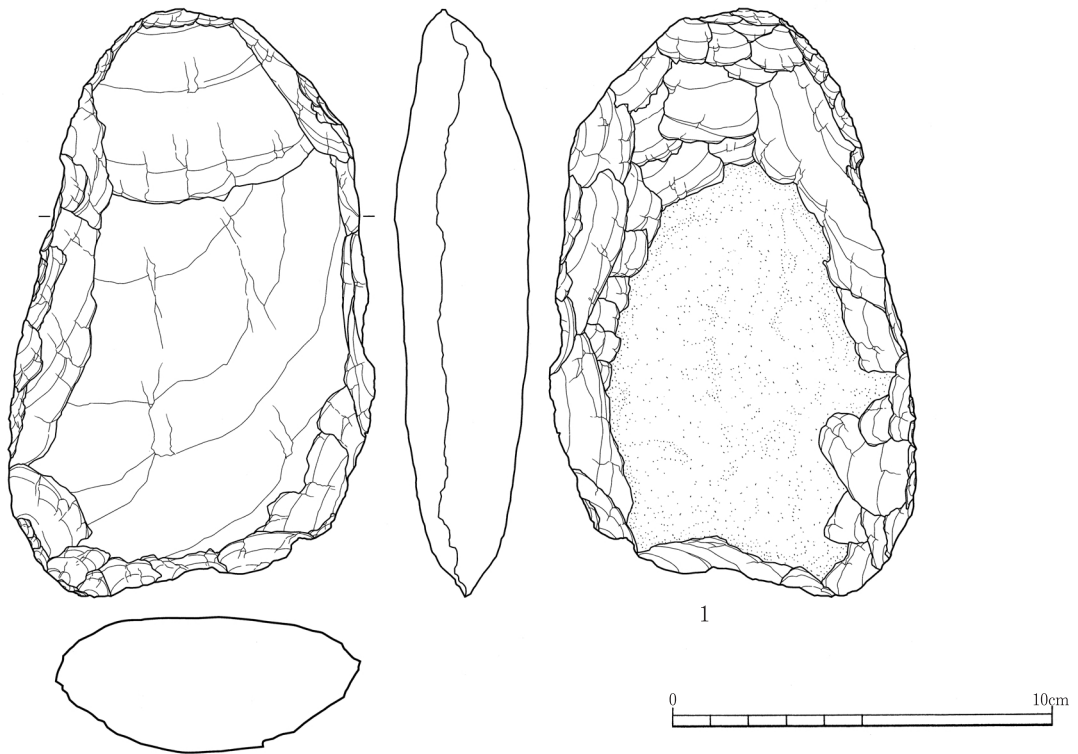
第5图 T1·4土层断面图 (S=1/50)

第2節 旧石器時代の遺物

本遺跡の旧石器時代の調査は、縄文時代早期の調査を終了した箇所から順次トレンチを設定し、調査区の西側ではXI層まで、東側ではXIII層まで、T1ではXI層まで下げながら実施した。C7グリッドのX層中より打製石斧（第7図1）が出土した。遺物はその1点のみであった。全体的に風化しており、剥離した厚い礫片の周縁に加工を施している。末端に刃部を設定し、若干の偏刃が見られ、損耗によるものか先端は薄くなっている。石材はホルンフェルスである。



第6図 旧石器時代調査トレンチ配置図 (S=1/1,500)



第7図 旧石器時代出土遺物実測図 (S=1/2)

第3節 縄文時代の遺構と遺物

遺構

二次堆積 K-Ah (IVa層)・K-Ah (IVb層)・MB0 (V層) が北部では確認できないため、縄文時代の遺構・遺物は ML1 (VIa層) 上面で検出を行った結果、遺構は散礫が3箇所、集石遺構15基、土坑18基を検出した。散礫・集石遺構とも南部のみからの検出となった。北部からは土坑8基を検出したが、埋土や底部からは縄文時代後・晩期の土器が出土し、埋土の状況を考慮すると、SI13・14以外の北半部の土坑は縄文時代後期以降であると思われる。

1 散礫

A区において、黒褐色土 (V層) を掘削中に多量の礫が検出された。A区では K-Ah (IV層) が良好に残存しており、包含層からは縄文時代早期の土器片が出土しているため、時期は縄文時代早期であると考えられる。また、南部で褐色土 (VIa層) より検出された散礫も同層より縄文時代早期土器片が出土しているため縄文時代早期に位置づけた。

散礫1

A区北部の斜面の中腹から検出された。全体的に散漫に分布しており、斜面を東へ下るにつれ若干密度が濃くなる傾向があった。構成礫は尾鈴山酸性岩類が中心で、赤化礫の割合は全体の一割程度で、円礫の割れたものが多かった。散礫の下から、SI14・15が検出され、東部からは土坑が3基検出された。

散礫2

散礫1の南東に隣接する箇所で検出された。礫の密度は散礫1よりも濃く、全体的に一様だった。構成礫は砂岩が中心で、赤化礫の割合も散礫1より多い。散礫2の下から SI1 が検出された。

散礫3

A区南西端調査区際の最も標高が高い箇所の VIa 層面から 20cm 程度掘削した高さで検出し、同層より土器片が出土しているため縄文時代のものであると想定した。礫の密度は斜面下ほど濃くなっている。構成礫は砂岩と尾鈴山酸性岩類がほぼ同規模で、赤化礫の割合は散礫1よりも少ない。散礫3の西側斜面上に検出された SI11・12・13に付随するも

のと思われる。

2 集石遺構 (第9図～第11図)

A区は K-Ah が良好に残存していたため、散礫下より検出した集石遺構以外の遺構も縄文時代早期にあたと推測した。分布に特に傾向は見られず、また、それぞれ類別の分布も傾向は見られなかった。全て斜面中腹での検出となったが、SI11～13はA区南西部の若干傾斜が緩やかな場所で検出された。礫の大きさはどれも小礫から拳大ほどで、赤化礫はどれも割合は半分以下であった。

集石遺構はここでは「掘り込みの有無」と「配石の有無」の二つの観点から以下の3つのタイプに分類して掲載した。

A類：明確な掘り込みがないもの

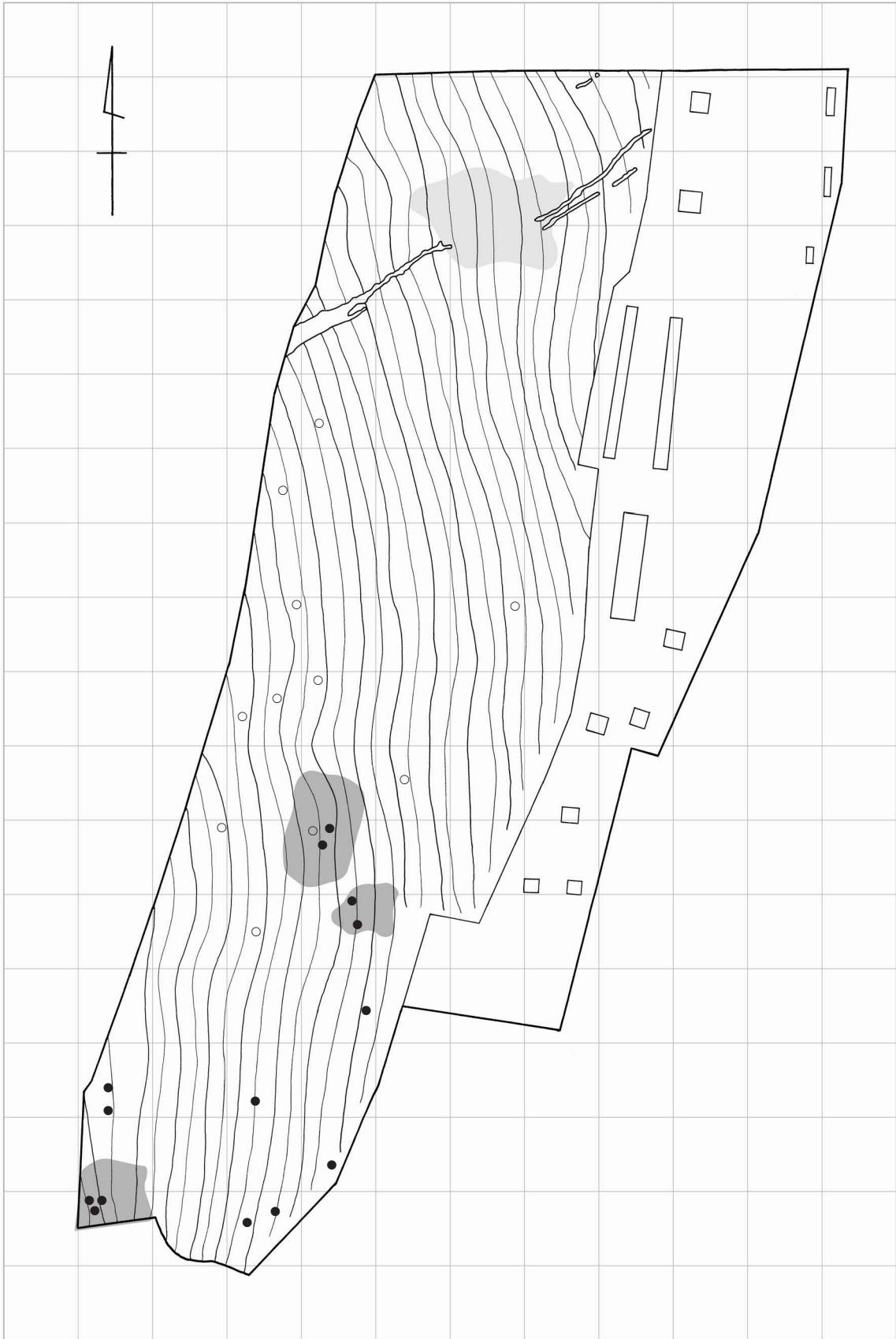
B類：掘り込みがあるが、配石をもたないもの

C類：掘り込みがあり、配石をもつもの

A類は SI7・10・14・15が相当する。赤化が確認できず、表面が風化した段丘礫を取り除いた後に、密集した礫の群を集石遺構とみなした。SI7・10は主に径10cm前後の礫で構成され、中央に径20cm以上の礫が見られた。SI14・15は散礫1の礫を除去した後、赤化した破碎礫を含みある程度の密度を保ったものを集石遺構とした。

B類は SI1・3・4・6・8・9・11・12が相当する。埋土は総じて固くしまった暗褐色土であり、少量ではあるが炭化物を確認できるものもあった。SI8・12は二層に分かれ、径10cm前後の礫が主で径15cm以上の礫をまばらに含むが、SI1は主に径が10～15cm以上の礫で構成されている。また、SI6は掘り込み中央に径20cm以上の赤化礫が確認できた。

C類は SI2・13が相当する。SI2は径10～15cmの礫で構成されている。配石の一つは径約55cmで表面が赤化していたが、裏面で赤化は確認できなかったため、元々その場にあった自然礫(尾鈴山酸性岩類)を利用したと判断した。



第 8 図 遺構分布図 (S = 1/800)

3 土坑（第12・13図）

南半部の土坑（SC1～10）は、VIa層面で検出された。土坑の埋土はVIa層と質が大差ないものがほとんどで、ニジミヤシミ程度の状態で認識されることが多かった。A区の土坑は、一層もしくは二層で、埋土は固くしまっているものがほとんどだった。規模は長軸1m弱～3m強、短軸0.5m～1.3mのものまでであるが、総じて埋土中より遺物を確認することができなかった。また、わずかに炭化物は確認したものの、焼土はどの土坑からも確認できず、炉穴となるものはなかった。底部の凹凸が激しいものは樹痕であった可能性がある。土坑の分布に傾向は見られなかった。SC4（第12図）は、掘り進めると中央に礫が集中した形で検出されたが、赤化した礫は見られず、また埋土には炭化物が少量見られる程度で焼土は見られなかった。礫も全て段丘礫であった。

北半部の土坑は埋土が黒褐色や暗褐色のものが多く、Ⅲ層では識別が難しいためVIa層まで掘削した後に検出された。南半部の土坑と比べ、炭化物の割合が多く、遺物も埋土中より縄文時代後・晩期の土器や打製石斧、敲石等が出土しているものもある。埋土の状況の類似性から、SC13・14はA区の土坑と時代が近く、残りの土坑は縄文時代後・晩期に該当すると思われる。土坑の分布に傾向といったものは見られないが、南半部の土坑に比べて周辺に遺物の散布が目立つ。

SC11（第14図）

D10グリッドでⅢ層より検出した。長軸1.75m、短軸1.16m、深さは検出面より1.66mを測り、XI層まで達する。杭痕はないが、形状・深さから陥し穴である可能性がある。2は口縁部に貼付突帯文が付き、その上に二条の沈線が巡る。Ⅲ層より出土した。

SC12（第15図）

D12グリッドで検出された。Ⅲ層掘削中にまとまった数の遺物が出土し、VIa層上面で土坑と認識した。長軸1.76m、短軸1.55mの楕円形である。埋土からは深鉢の土器片が出土した。5は口唇部にやや膨らんだ突起を持つ深鉢の口縁部で、外面には貝

遺構名	総重量 (kg)	砂岩重量 (kg)	尾鈴山酸性岩類重量 (kg)	ホルンフェルス重量 (kg)	配石重量 (kg)
SI1	63.2	31.1	26.4	5.7	
SI2	215.3	58.5	63.8	18.9	74.1 尾鈴
SI3	33.8	8.5	14.2	11.1	
SI4	47.8	18.4	23.6	5.8	
SI5	37.5	18.9	12.4	6.2	
SI6	104.8	32.4	58.8	13.6	
SI7	35.3	11.9	14.6	8.8	
SI8	97.8	45.5	39.5	12.8	
SI9	26.5	15.7	4.4	6.4	
SI10	55.8	15.2	32.5	8.1	
SI11	79.5	36.5	32.8	10.2	
SI12	47.0	14.3	26.8	5.9	
SI13	91.4	23.1	34.7	14.2	19.4 ホルン
SI14	6.2	2.8	1.3	2.1	
SI15	10.6	3.4	4.8	2.6	
散礫1	477.6	158.3	260.4	58.9	
散礫2	153.1	98.2	40.4	14.5	
散礫3	89.2	39.8	41.3	8.1	

第2表 集石遺構・散礫観察表

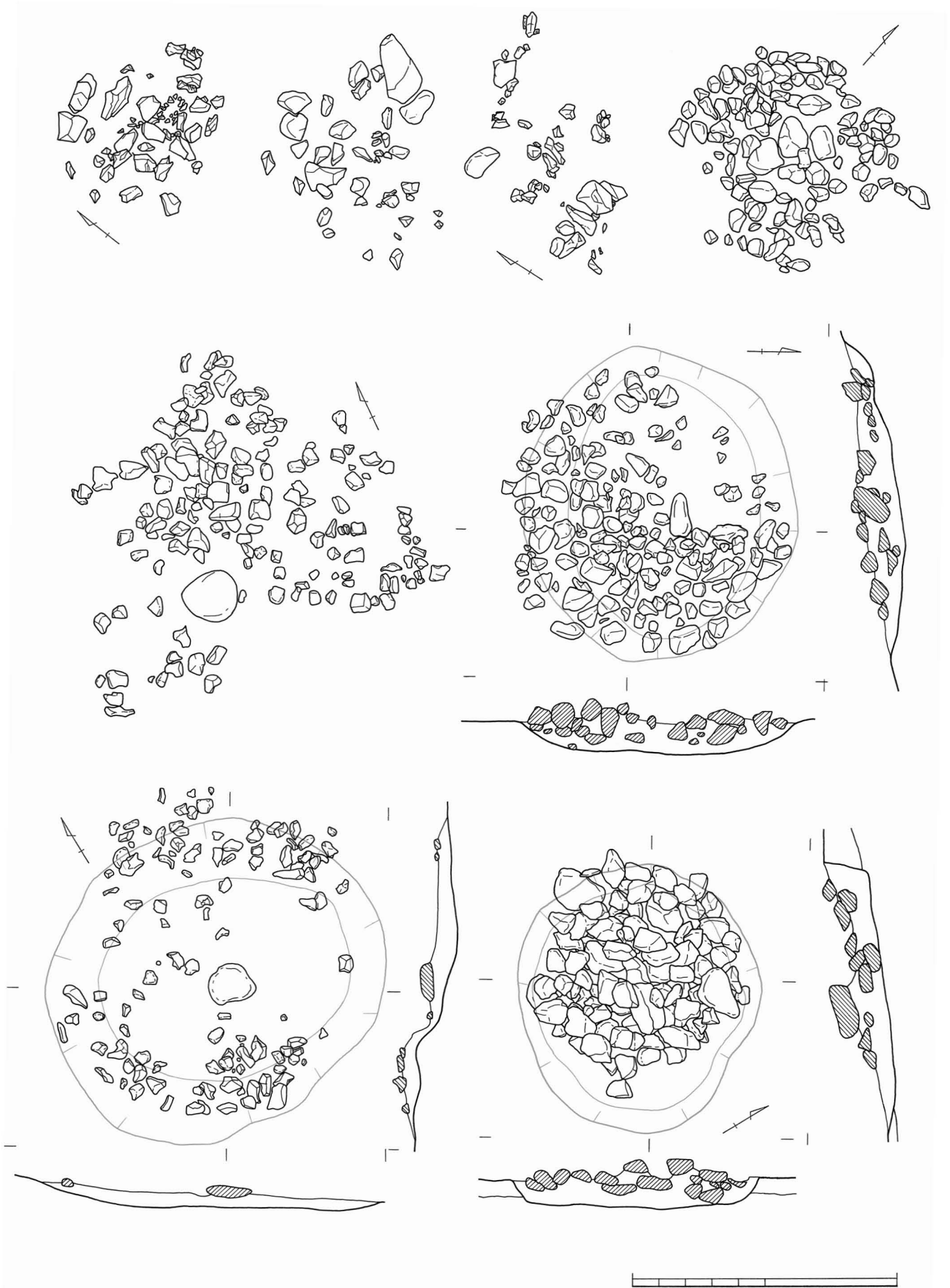
殻条痕文が施されている。6は「くの字」状に開く口縁部を持つ深鉢の胴部で磨消縄文と沈線文が巡っている。8は口縁が緩やかに「くの字」状に開く深鉢の口縁部で波状口縁を持つ。

SC17（第16図）

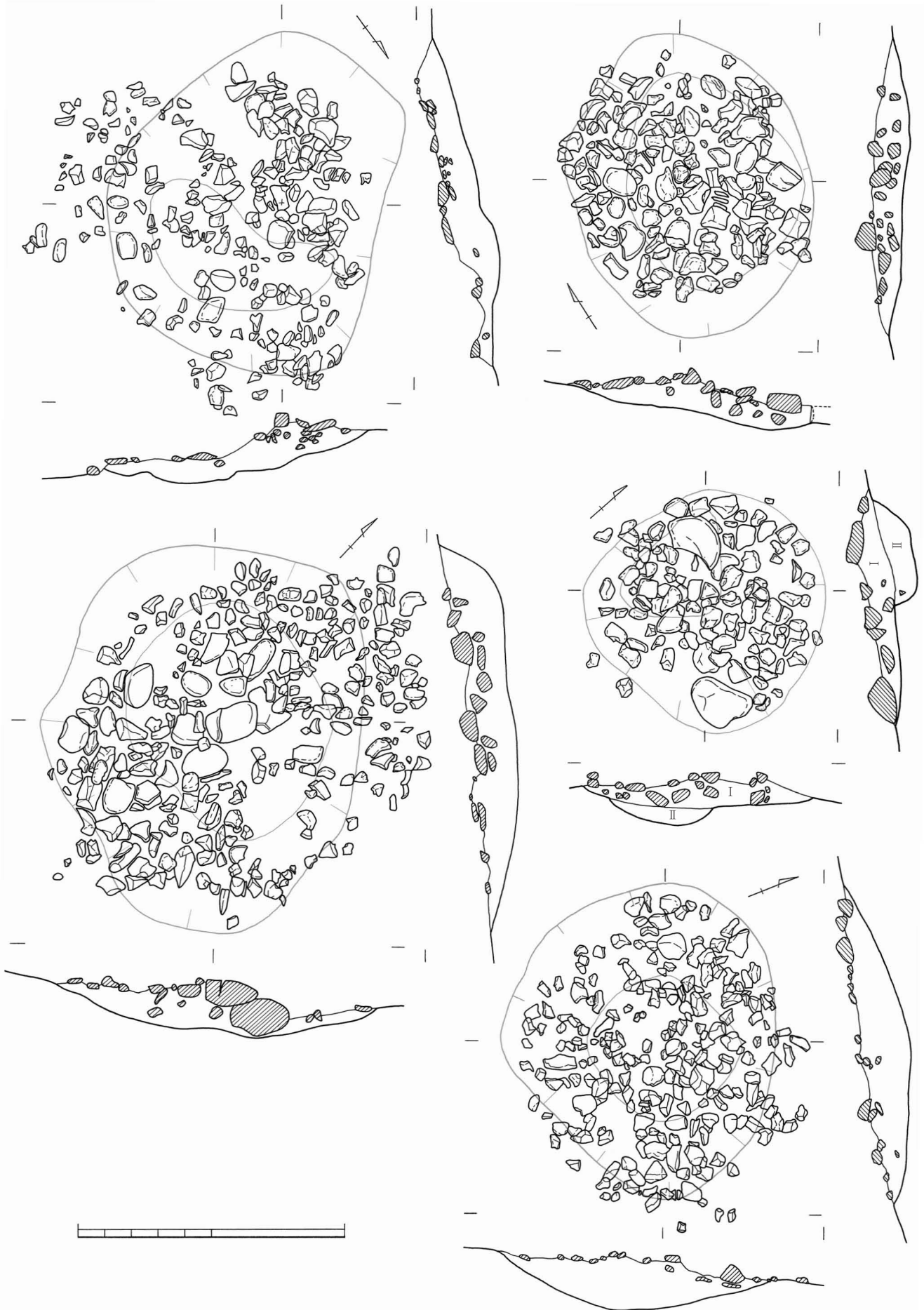
G10グリッドで検出された。長軸0.95m、短軸0.85mを測る。細かい炭化物を多量に含み、遺物も内包していた。9は浅鉢の口縁部片で、口縁端部が玉縁状を呈しており、内面に浅い沈線を施し段を形成している。12は深鉢の底部で内面には煤が付着していた。14は形状が二等辺三角形に近く、刃部には偏刃が見られる。15は形状が長方形に近い打製石斧の刃部である。石材は二つともホルンフェルスである。

包含層出土遺物

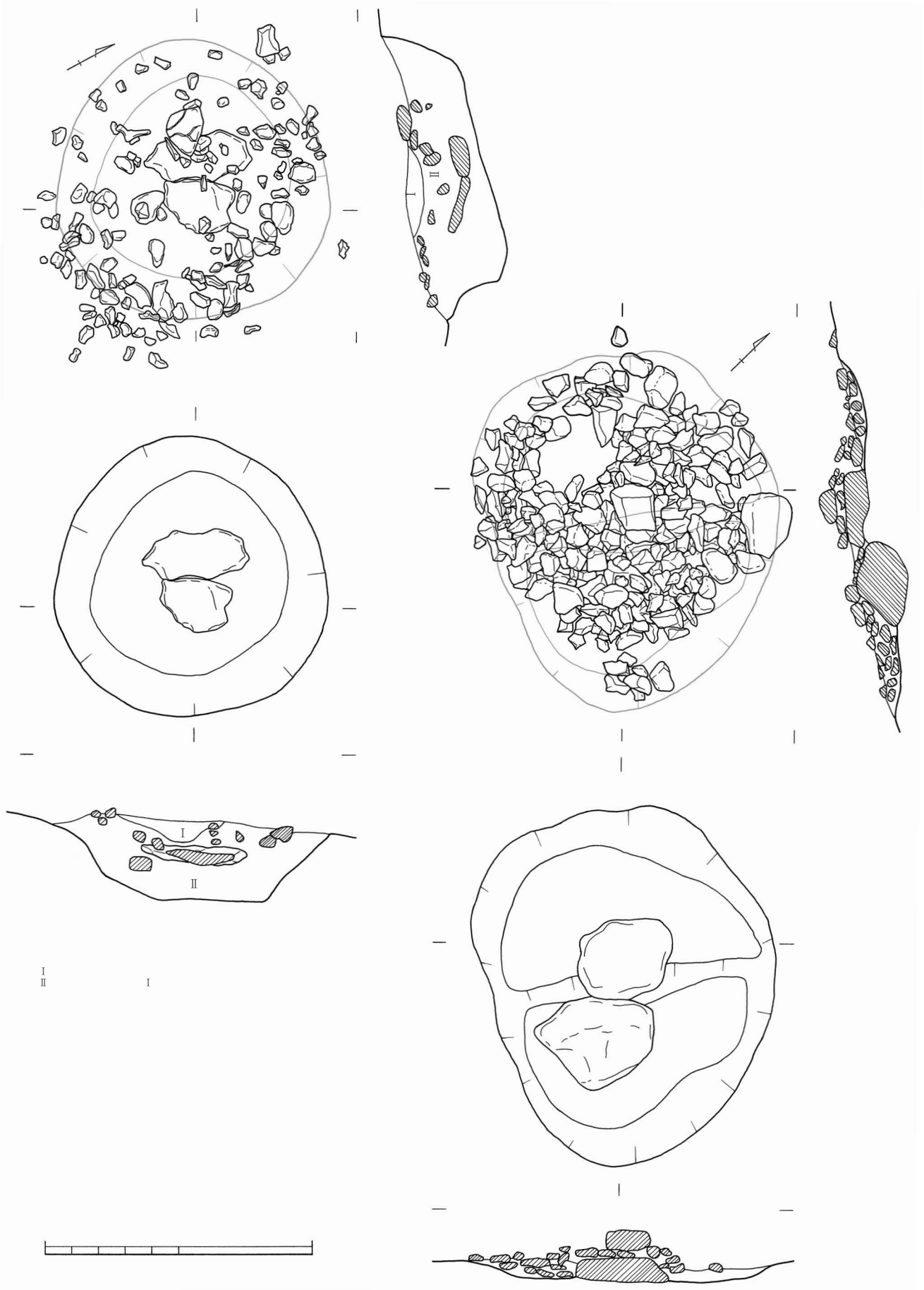
遺物が出土した層は主にⅢ層とV層で、V層は縄文時代早期に該当するが、土器では図化に耐えられるものが少なく、A区で出土した1点のみを実測した。残りは全てB・C区からの出土で、両区ともIVa・b層、V層とも残存状態が悪く、遺物はⅢ層からの出土がほとんどであった。時期は縄文時代後・晩期にあたる。ここでは実測した縄文土器45点・石器



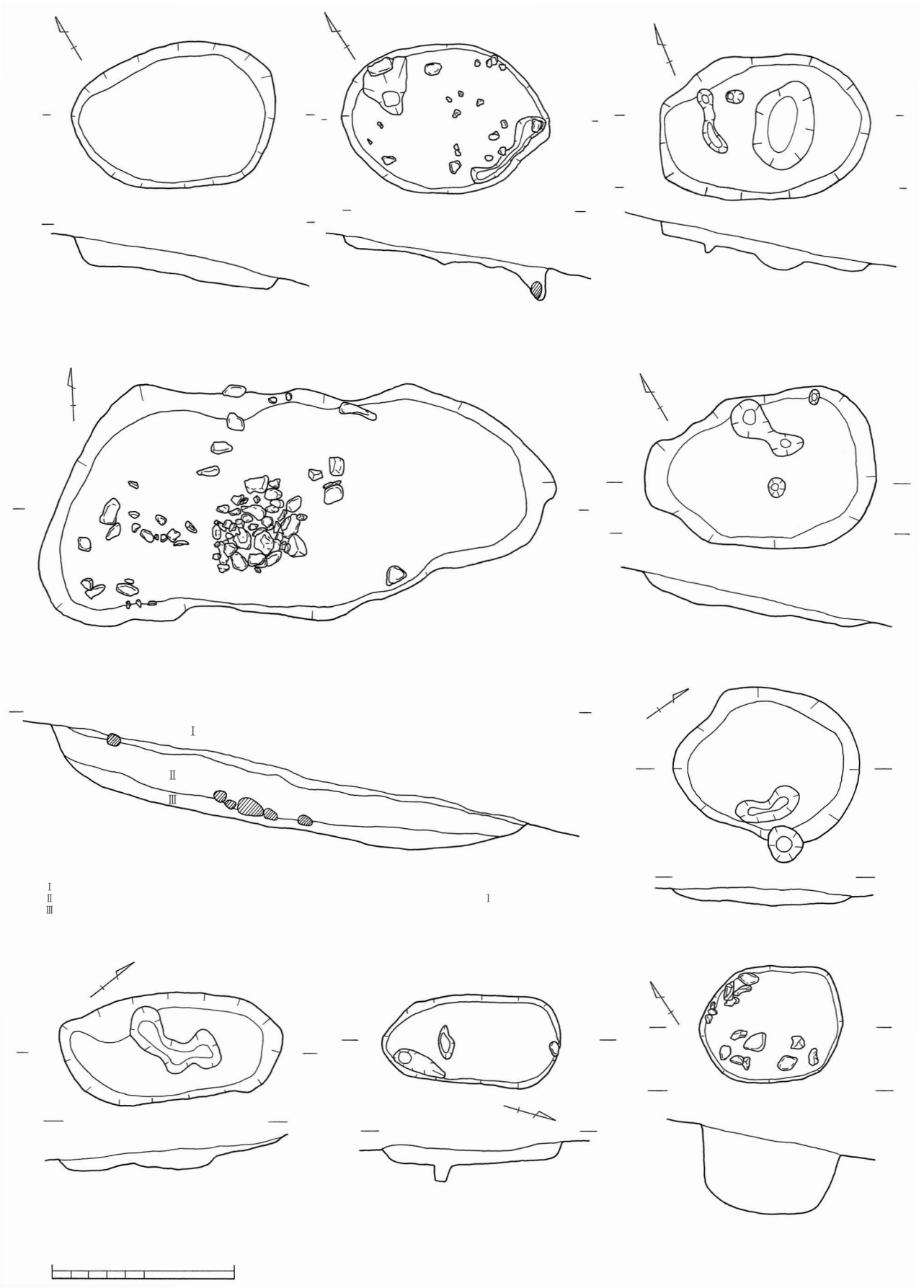
第9図 集石遺構実測図1 (S=1/20)



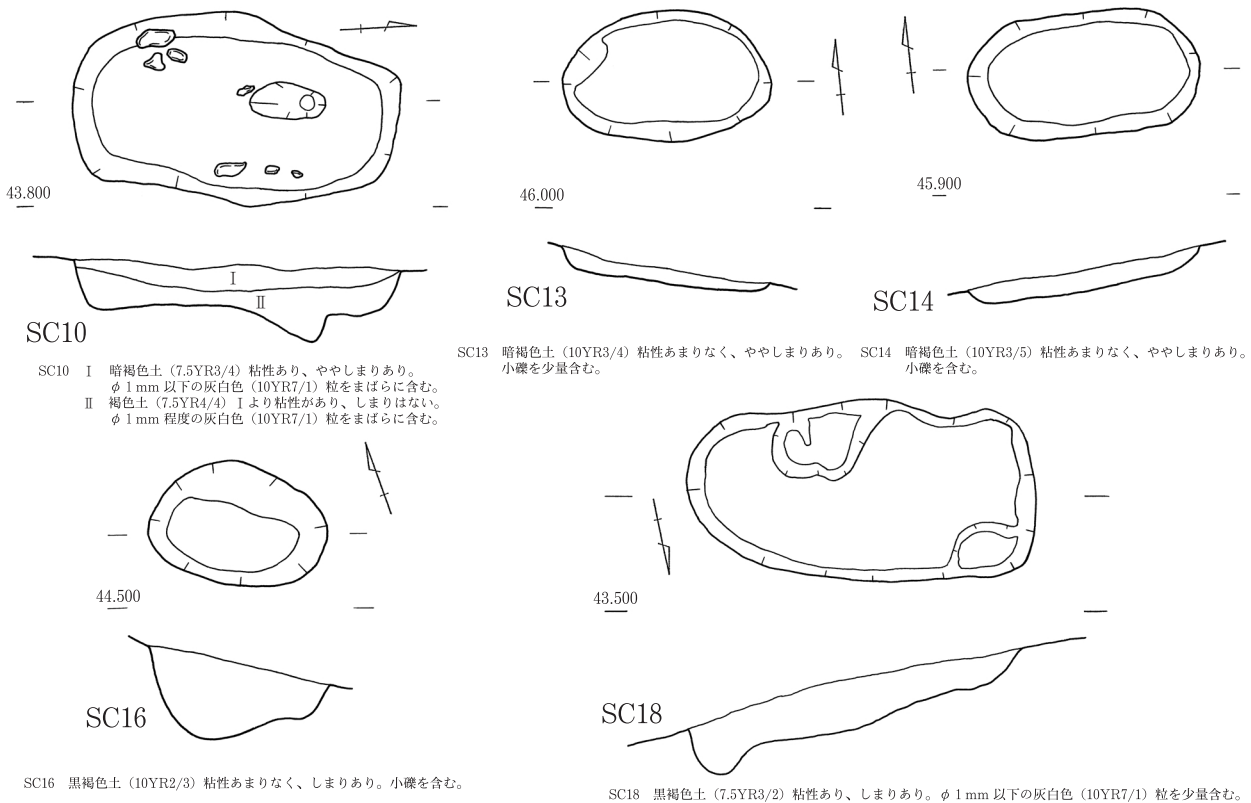
第10図 集石遺構実測図2 (S= 1/20)



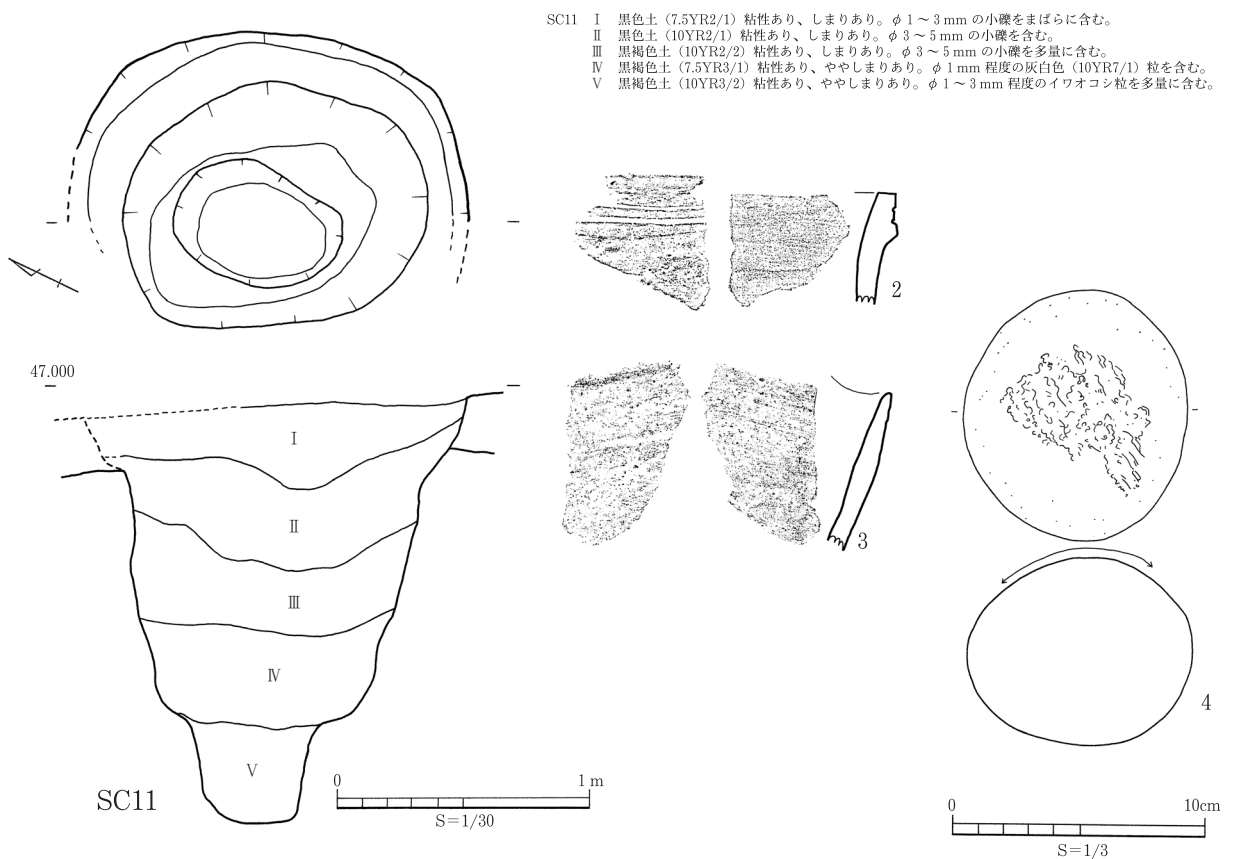
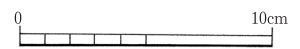
第11図 集石遺構実測図3 (S=1/20)



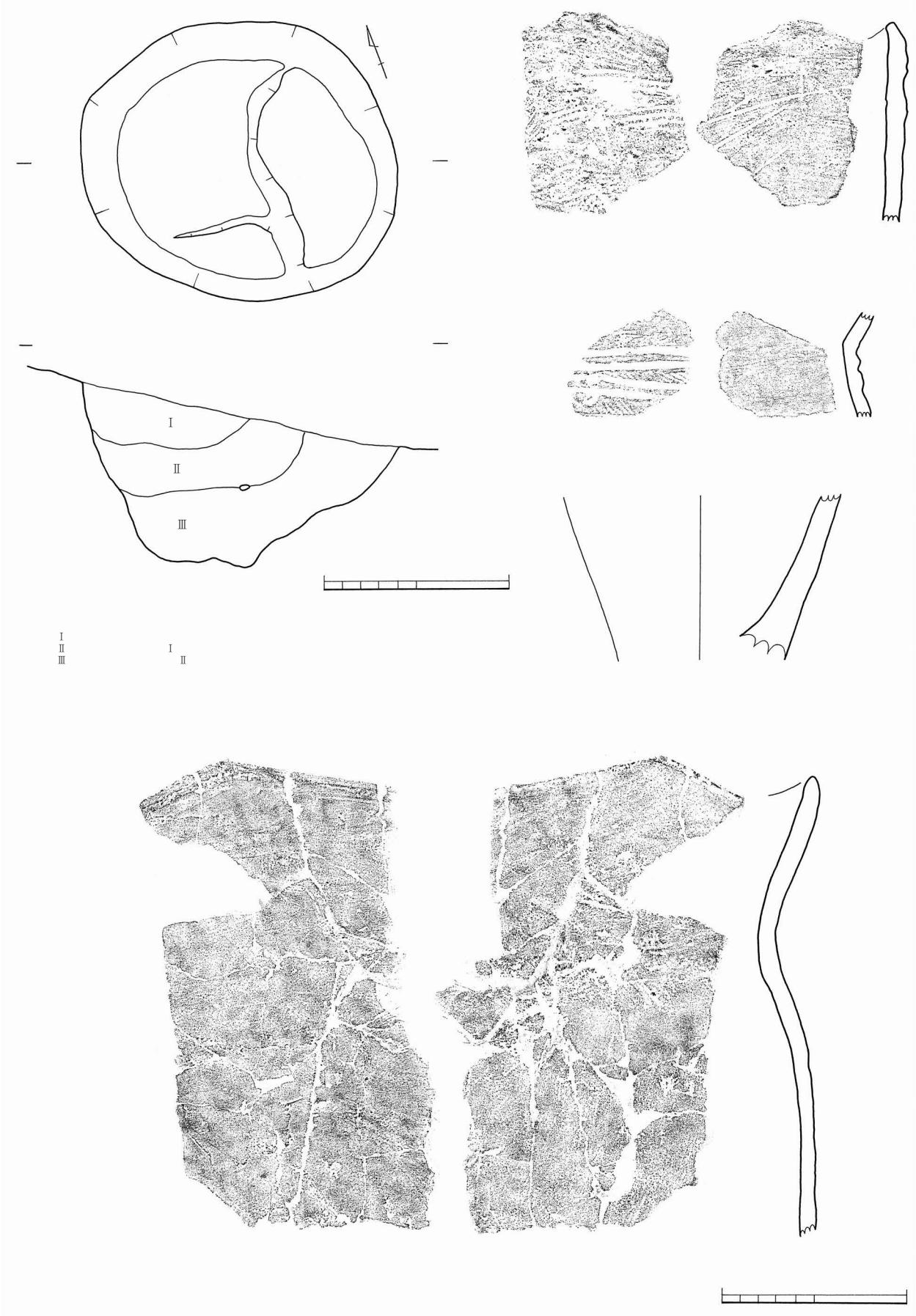
第12图 土坑实测图1 (S= 1/30)



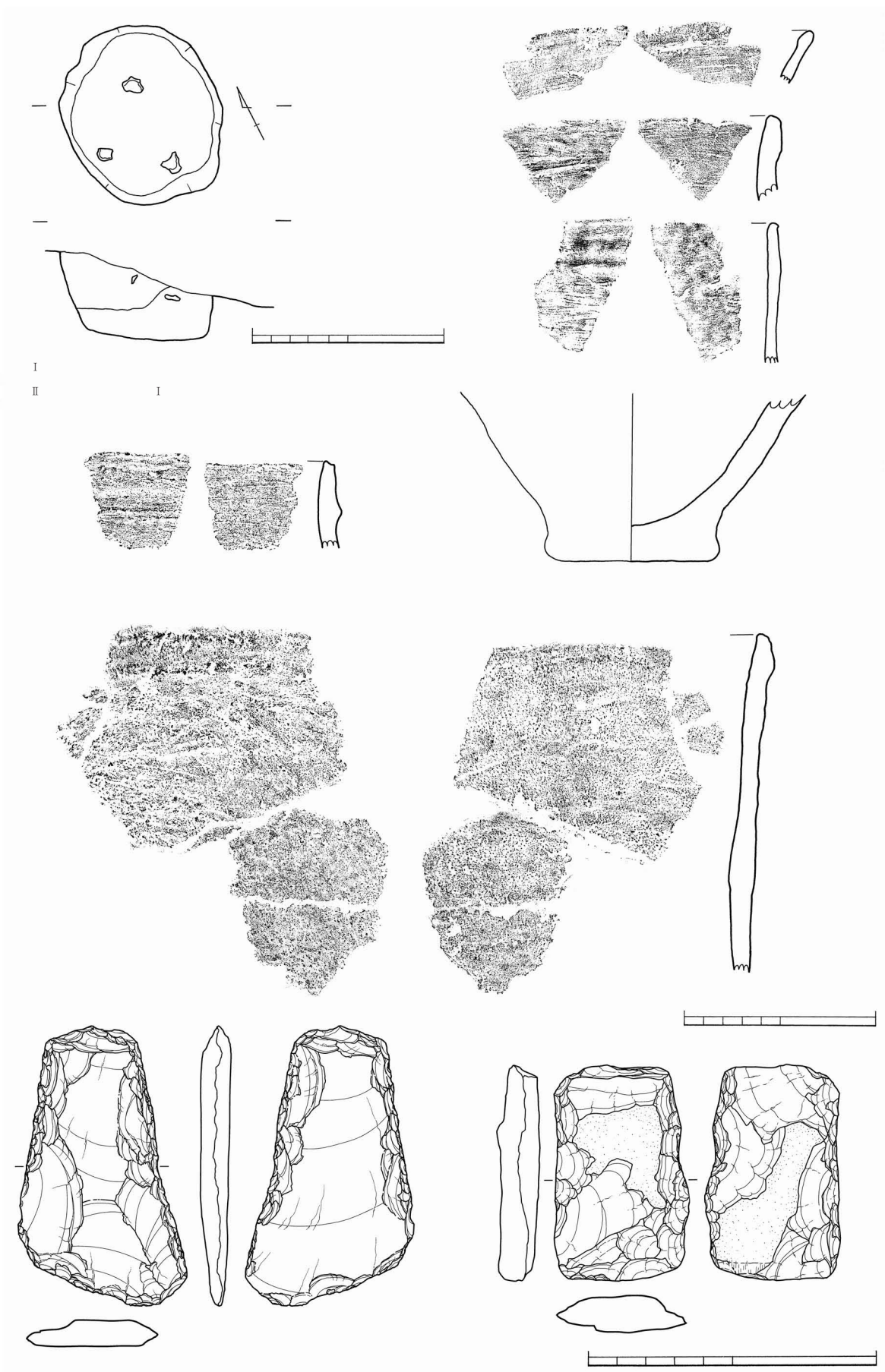
第13図 土坑実測図 2 (S = 1/30)



第14図 SC11及び出土遺物実測図



第15図 SC12及び出土遺物実測図



第16図 SC17及び出土遺物実測図

44点を掲載する。なお、実測図中の土器の傾きについては小片や胴部片などで不明瞭なものがある。

土器（第18図～第22図17～61）

17は深鉢の口縁部で外面は斜位（右下がり）の貝殻条痕文、内面にはナデが施されている。口縁部断面はやや鋭い三角形を呈する。

18～24は貼付突帯を施された口縁部の一群である。うち19～21は緩やかに外反する器形をなし、口縁部断面は18と21が矩形、23がやや鋭い三角形、19が台形、20が半円形を呈する。調整は内外面共に工具による横ナデだが、23の内面は丁寧なナデが施されている。

25～29は、口縁部が波状を呈する一群である。26・29は口縁部断面形が若干膨らみ丸くまとまる。28は緩やかに外反し、二条の突帯を有する。

31は口縁部内面に若干の凹みを有する。32は口縁部外面に二条の沈線を有する。33は口縁が緩やかに外反する器形で口唇部に二条の沈線を有する。34は口縁部に串状の工具で縦位に刺突が施されている。

35・36は孔列土器で、35は貼付突帯の上位二箇所穴が穿たれ、片方が貫通している。36は貼付突帯の下位と一部突帯にかかるように二箇所穴が穿たれている。口縁部にはヒレ状の突起が付随していた痕跡がある。また表面には赤色顔料のようなものが付着している。

37～41は精製の浅鉢で内外面ともミガキ調整が施されている。39と40と41は黒色磨研土器である。

42～45は台付皿である。42は内面に太くうねった隆起線を有する。43は口縁部内面に半円状の突起を有する。44は内面に瘤を有し、竹串状の工具による刺突文が施されている。45は脚部で内外面とも横位のナデが施されている。

46は深鉢の胴部で外面には、磨消縄文の後に5条の沈線が巡っている。内面はナデが施されている。47は深鉢の胴部で上部はキャリパー状に内湾すると思われる。52～58は底部で54は深鉢の底部で裏面には葉脈痕が残っている。

59は浅鉢で内外面には工具によるナデが施されている。60・61は圧痕が確認された土器である。60は断面中に長径約4.5mm、短径約2.5mmで中央に筋

を一条持つ圧痕が見られる。61は深鉢の底部で、内面に径約10mm、深さ約5mmの圧痕がある。

打製石鏃（第23図62～70）

打製石鏃は9点出土し、全て図化した。利用石材は黒曜石が3点、チャートが4点、玉髓が1点、ホルンフェルスが1点である。62～64は黒曜石製で64は姫島産である。62・63は平面形が二等辺三角形で基部はわずかに内湾する。64は挟りが三角状の凹基を呈する。65～68はチャート製で、68は二等辺三角形の平面形に基部は平基で65はわずかに内湾する。67はわずかに凹基を呈する。69はホルンフェルス製で二等辺三角形の平面形に基部は内湾する挟りを持つ。70は玉髓製で、挟りが入る基部を持つ五角形を呈する帖地型石鏃である。

スクレイパー・礫器（第23図71～74）

それぞれ2点ずつ出土し、全て図化した。利用石材はホルンフェルスである。73はA区のVIa層上で出土したもので早期の遺物である。

打製石斧（第24図～第26図81～90）

打製石斧は25点出土し、そのうち16点を図化した。いずれもB・C区でⅢ層より出土した。全てホルンフェルス製である。形状、調整、大きさから以下の3タイプに分類する。

I類（第24・25図81・82）

全体の形状が長方形に近く、石斧の中位辺りに最大幅がくるものをI類とした。刃部の形状は一定ではなく、傾向は見られなかった。

II類（第25図83～87 第26図88・89）

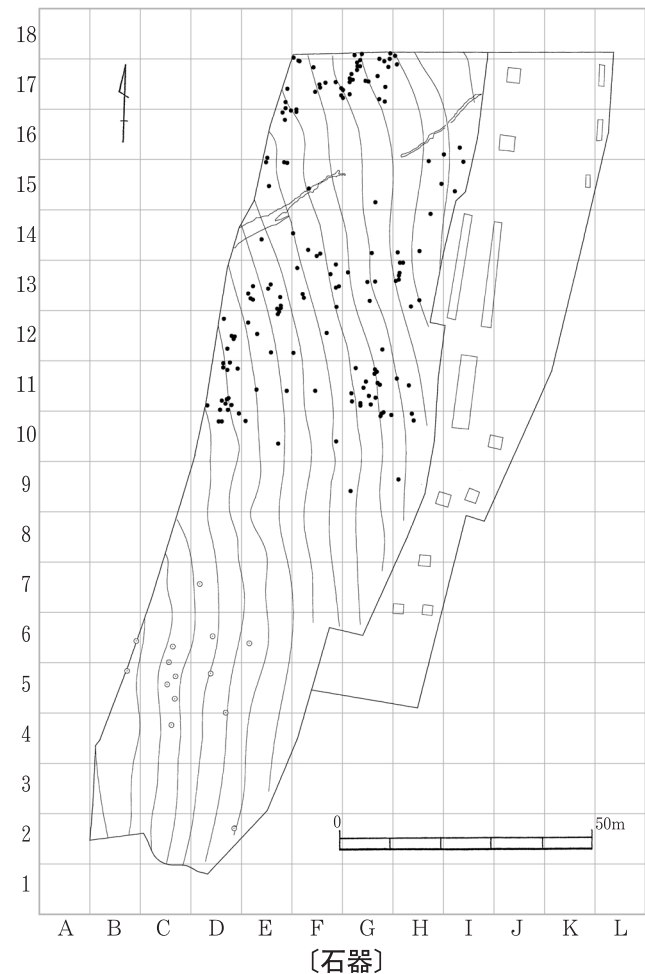
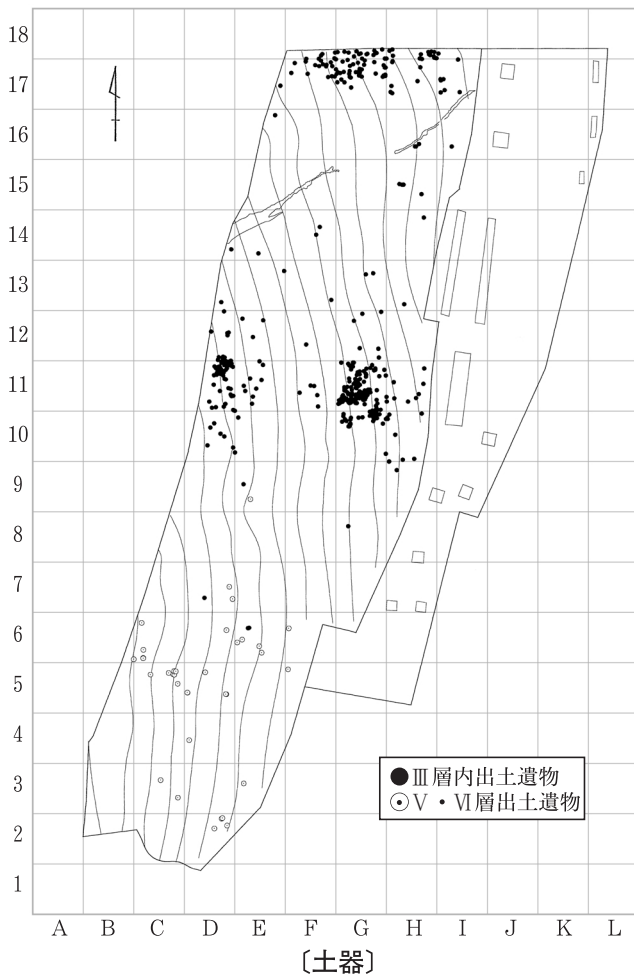
形状が二等辺三角形に近いもので石斧の下位に最大幅をもつもの、また、その形状で刃部が偏刃しているものをII類とした。

III類（第26図90）

I類とII類に当たらないものをIII類とした。90はI類より長辺が短くなり、形状はやや正方形に近く他のものより厚みがある。上下に刃部が施され、刃部の形状はほぼ直線である。

磨製石斧（第26図91・92、第27図93）

磨製石斧は3点出土し、全て図化した。出土状況は打製石斧と同じでⅢ層より出土した。91は、長方形に近い形状をし、刃部は直刃、断面形は扁平であ



第17図 包含層出土土器・石器分布図 (S= 1/1,500)

る。92・93は二等辺三角形に近い形状を持ち、最大幅は刃部に近い箇所にくる。刃部は円刃に近い。92は敲打痕が基部一面に残っており偏刃を持つ。93は敲打を施した後に磨いたと思われる。

台石 (第27図 94)

尾鈴山酸性岩類製で、表面に磨痕が見られる。A区V層より出土した。

石錘 (第28図 95~107)

石錘は27点出土し、うち13点を図化した。全て長軸の両端を打欠いたもので、利用石材は砂岩が16点でホルンフェルスが11点である。重量は約30~270gのものがあるが、150g以下のものが大半を占める。重量・石材別の出土地点の傾向は見られないが、ほとんどのものが調査区北端から出土した。

敲石 (第29図 108~116)

25点出土したうち、9点図化した。利用石材は砂

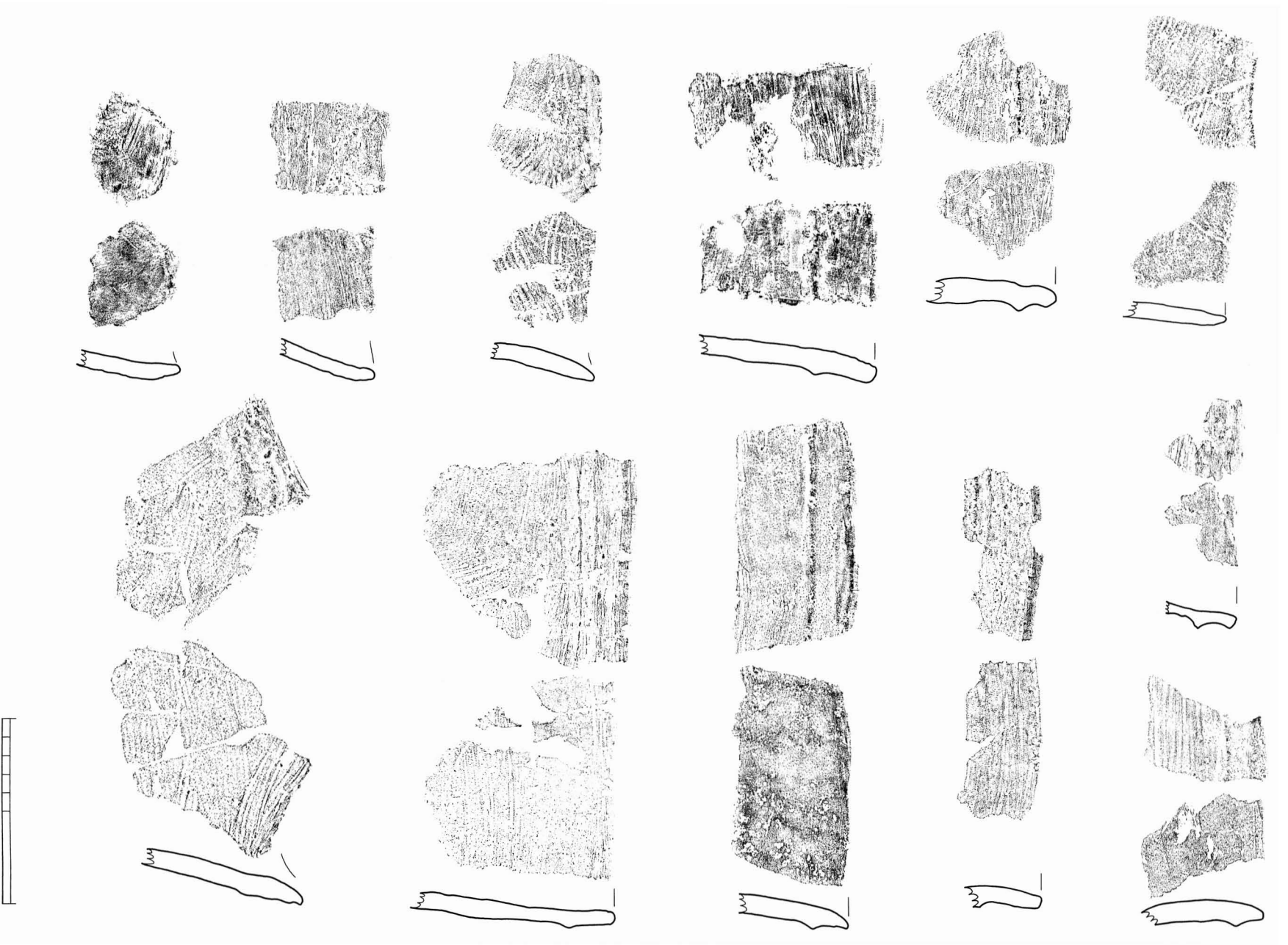
岩が12点、尾鈴山酸性岩類が12点、ホルンフェルスが1点である。110・112・115は側面に敲打痕が一周巡っている。110・112は尾鈴山酸性岩類製で、115は砂岩製である。

磨石 (第29図 117~119)

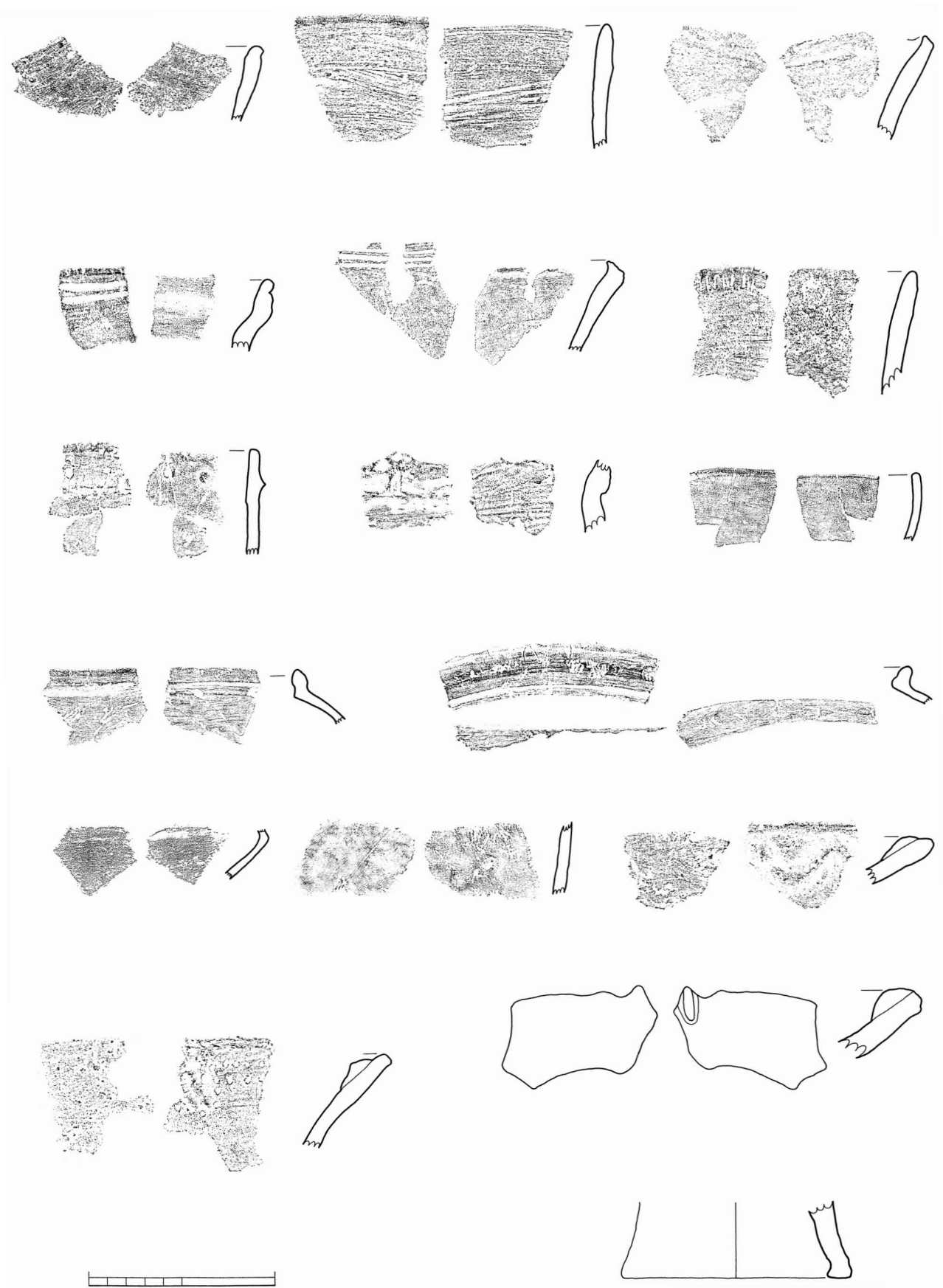
9点出土し、そのうち3点を図化した。砂岩製が6点で尾鈴山酸性岩類製が2点、ホルンフェルス製が1点である。119には中位に、117と118には側縁に敲打痕が見られる。いずれも表面の一部に磨痕が残る。

石核・細石刃核 (第30図 120~124)

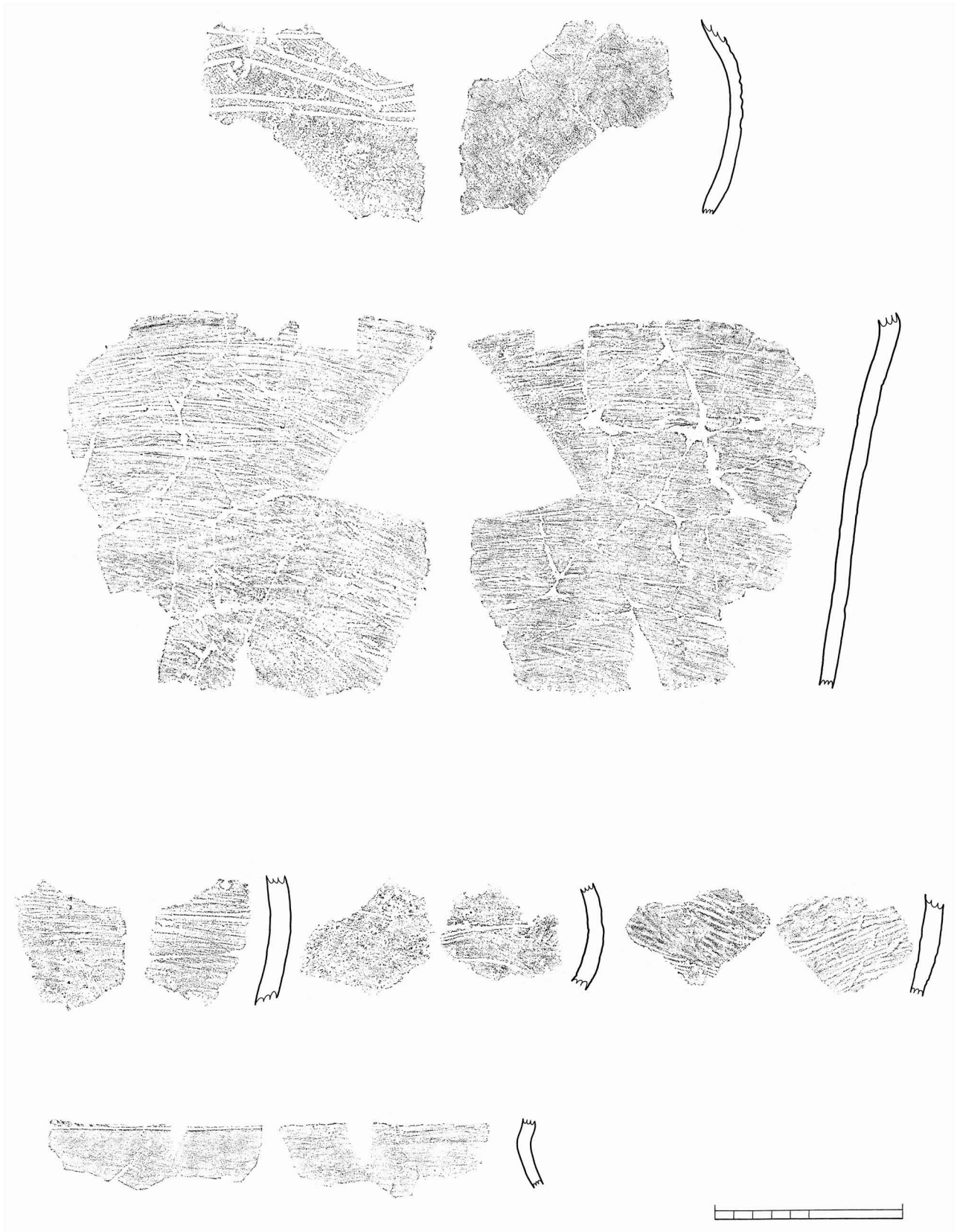
石核は6点出土し、そのうち4点を図化した。石材はチャートが1点、ホルンフェルスが5点だった。124は桑ノ木津留産の黒曜石製細石刃核である。



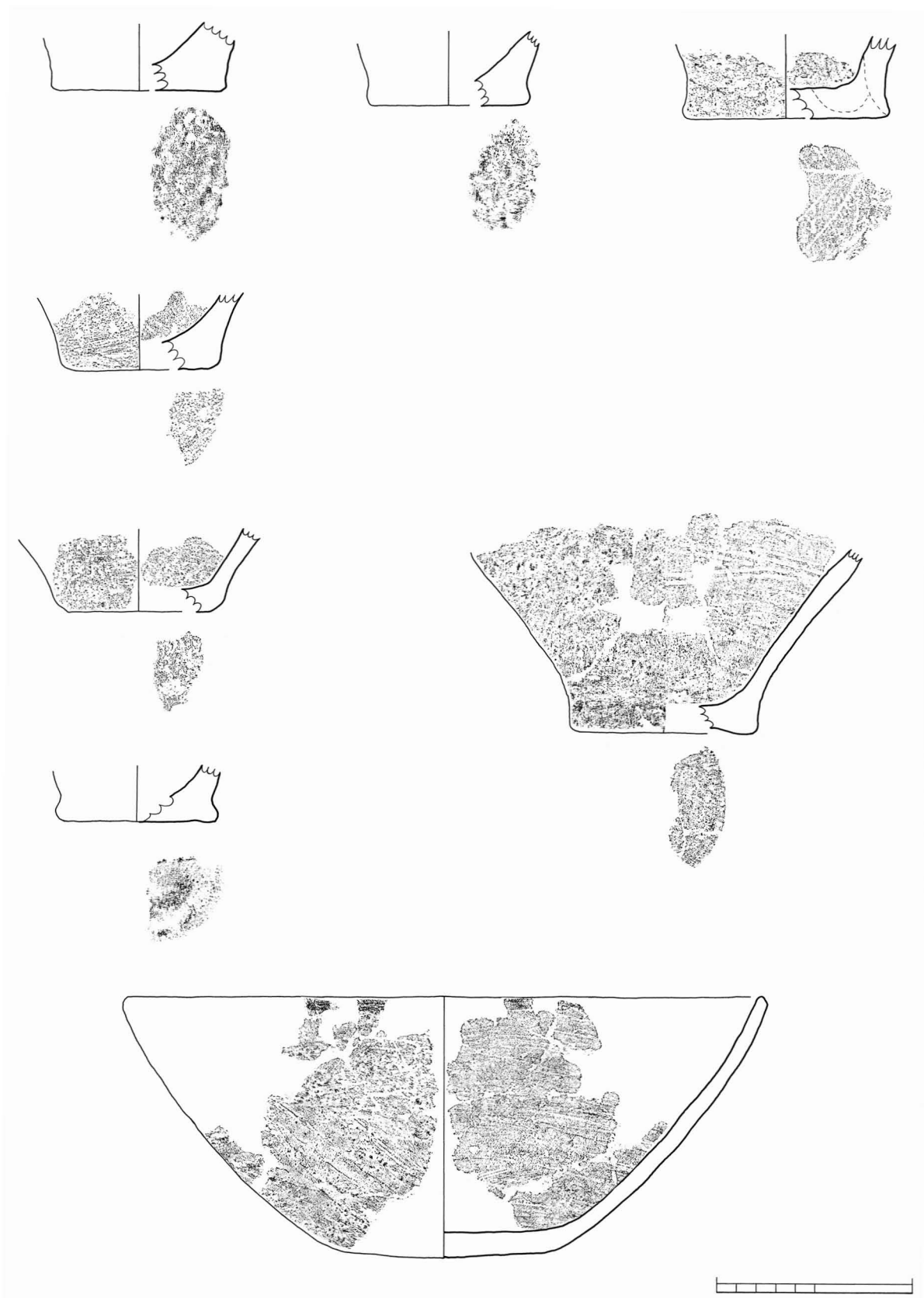
第18图 包舍层出土土器实测图 1 (S=1/3)



第19图 包含層出土土器実測図2 (S= 1/3)



第20图 包含層出土土器実測图 3 (S=1/3)



第21图 包含層出土土器実測図4 (S=1/3)

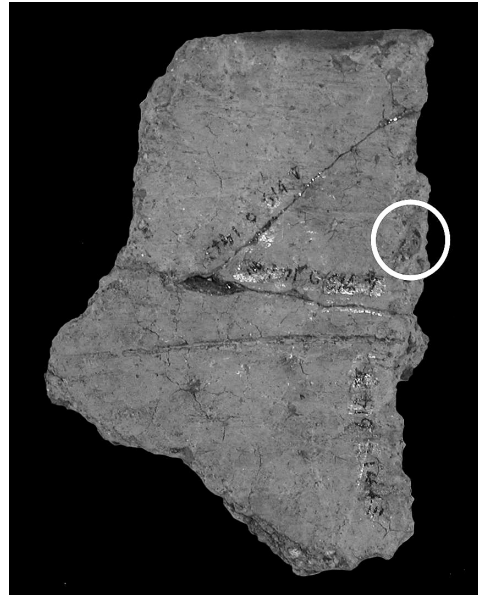


写真1 60圧痕位置



写真2 60圧痕拡大状況

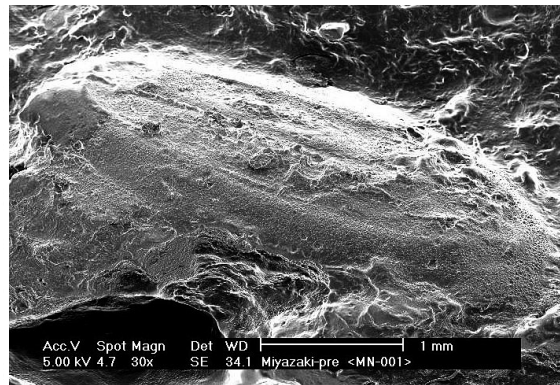


写真3 60電子顕微鏡による圧痕拡大状況

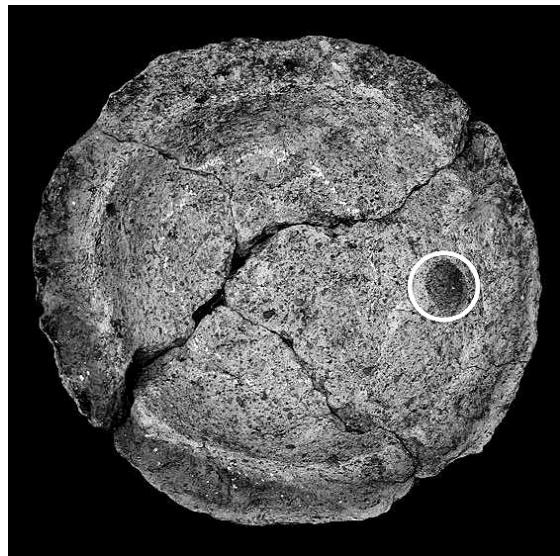
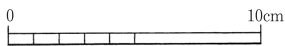
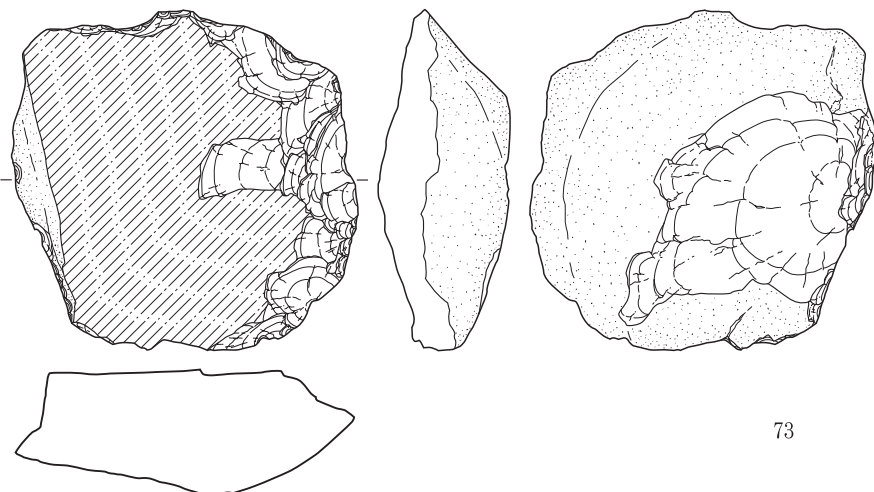
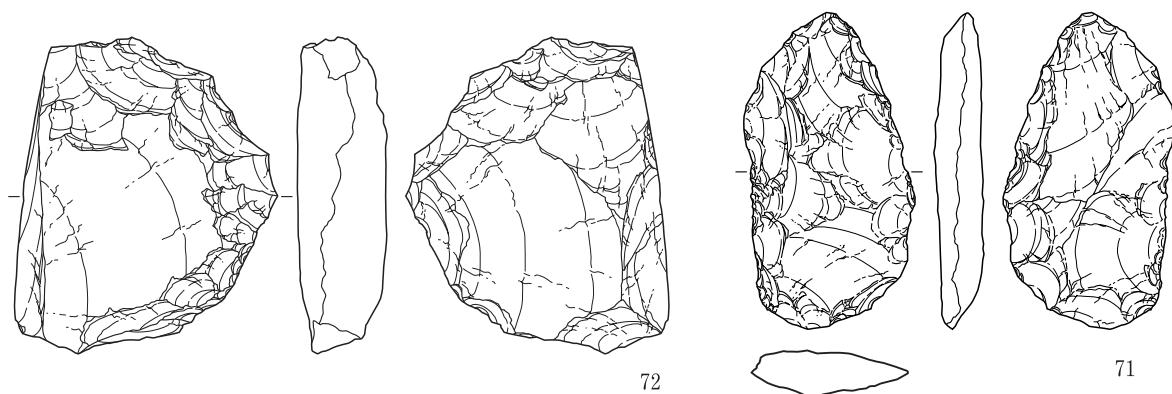
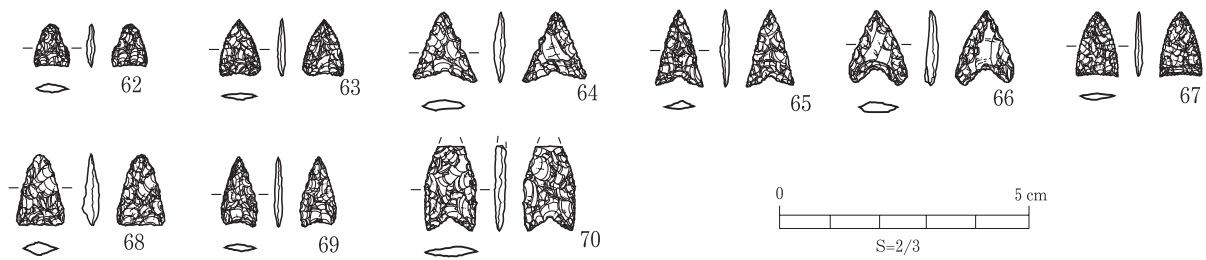
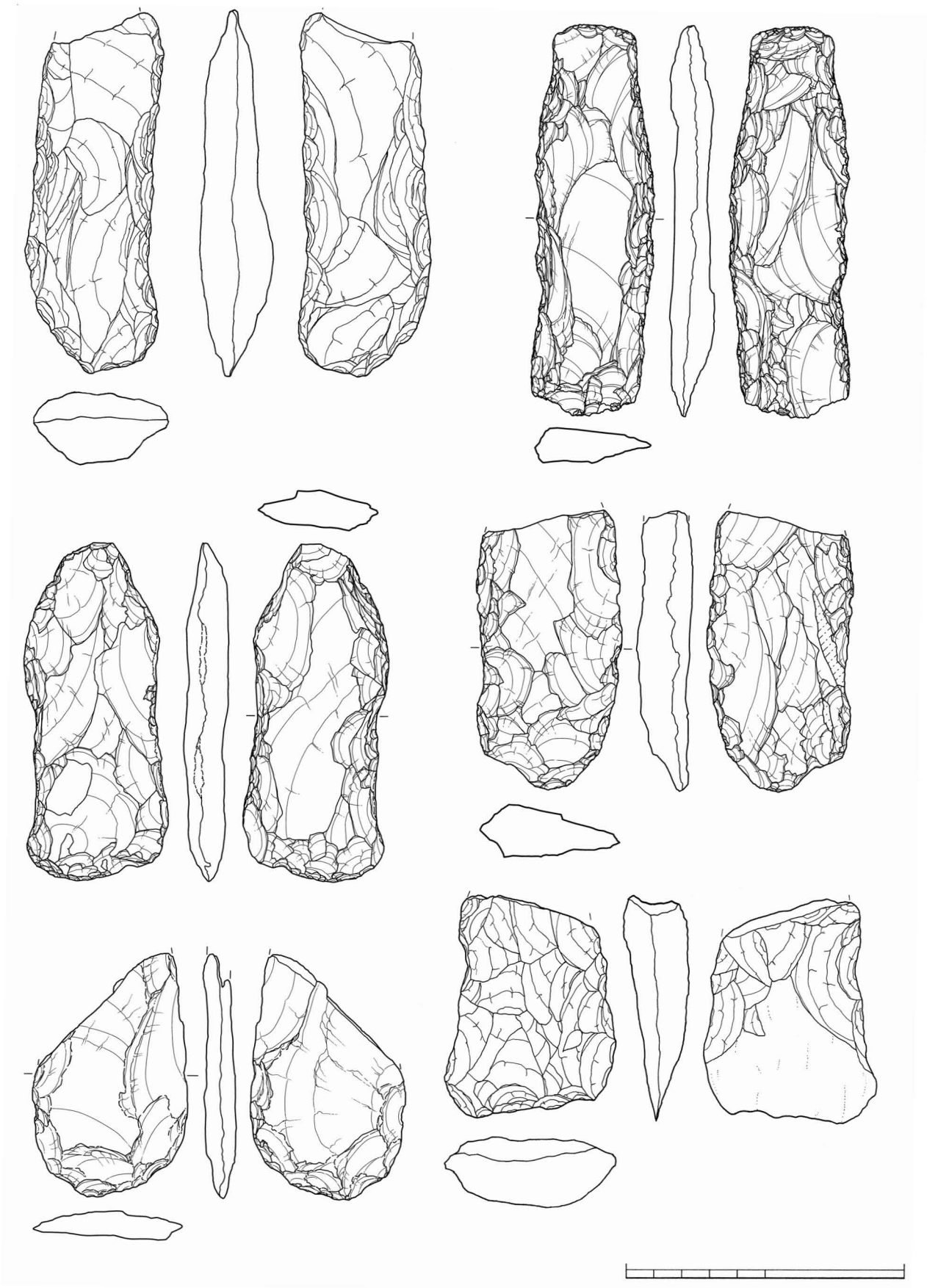


写真4 61圧痕位置

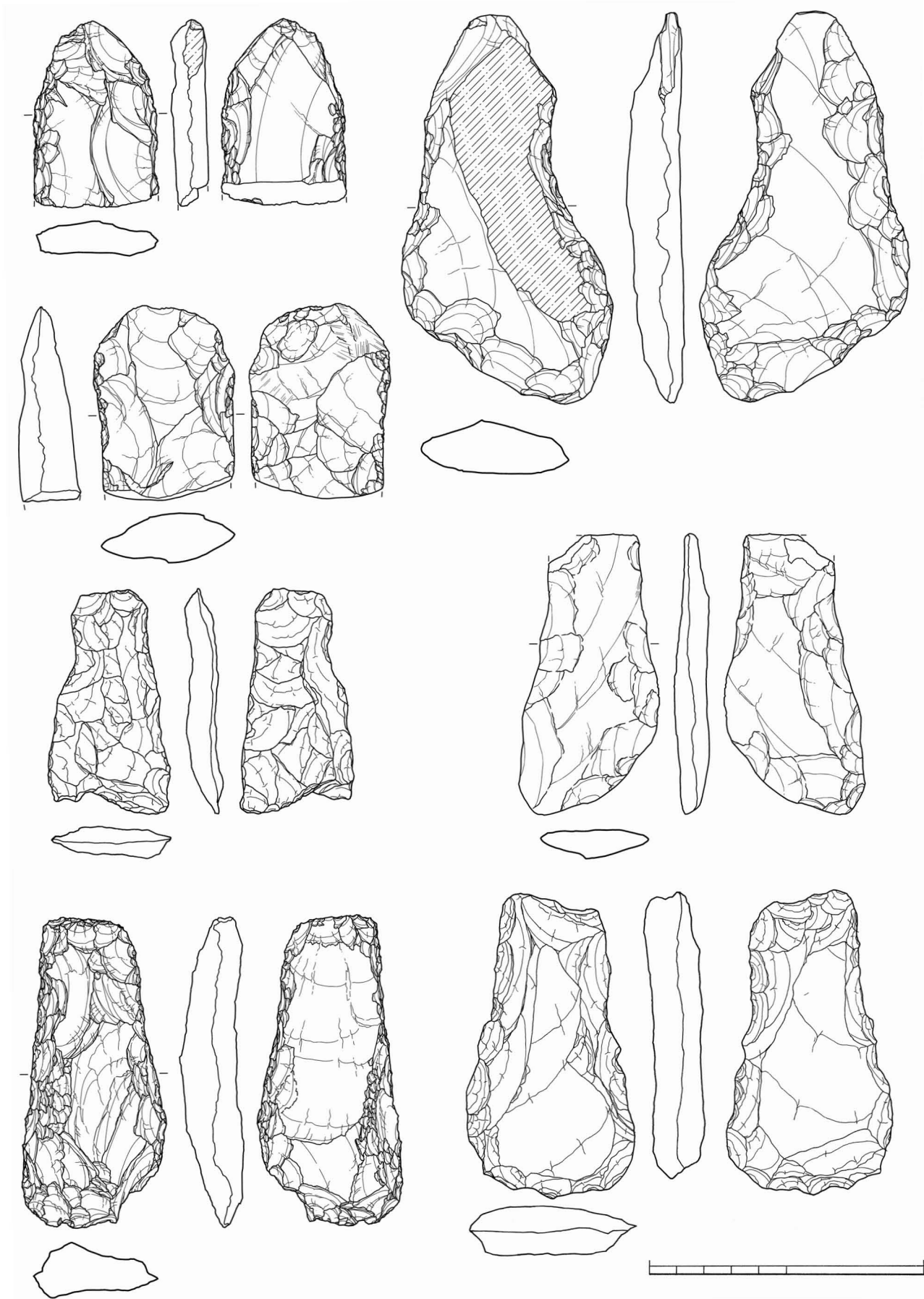
第22図 圧痕土器実測図 (S= 1/3)



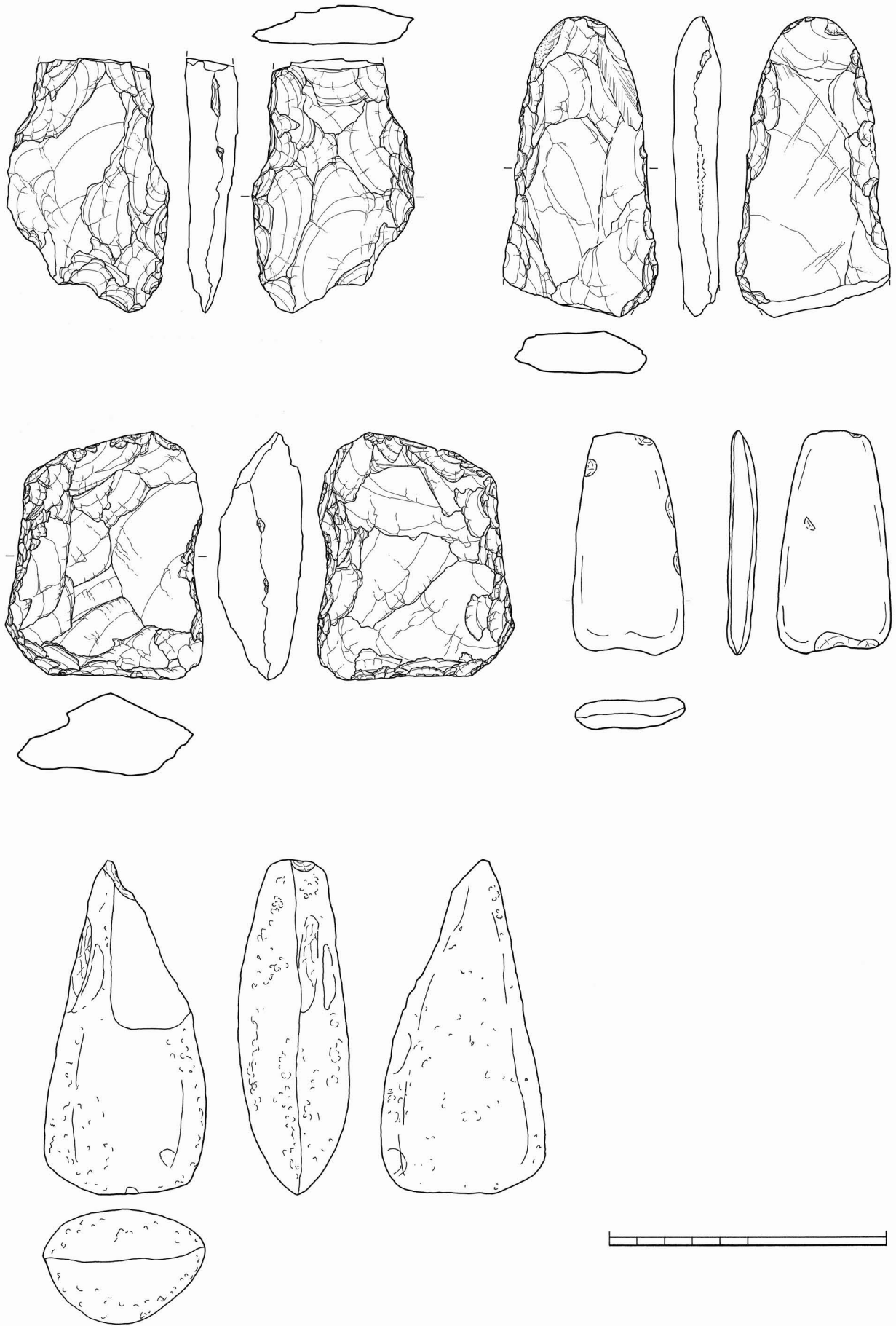
第23图 包含層出土石器实测图1 (S=1/2)



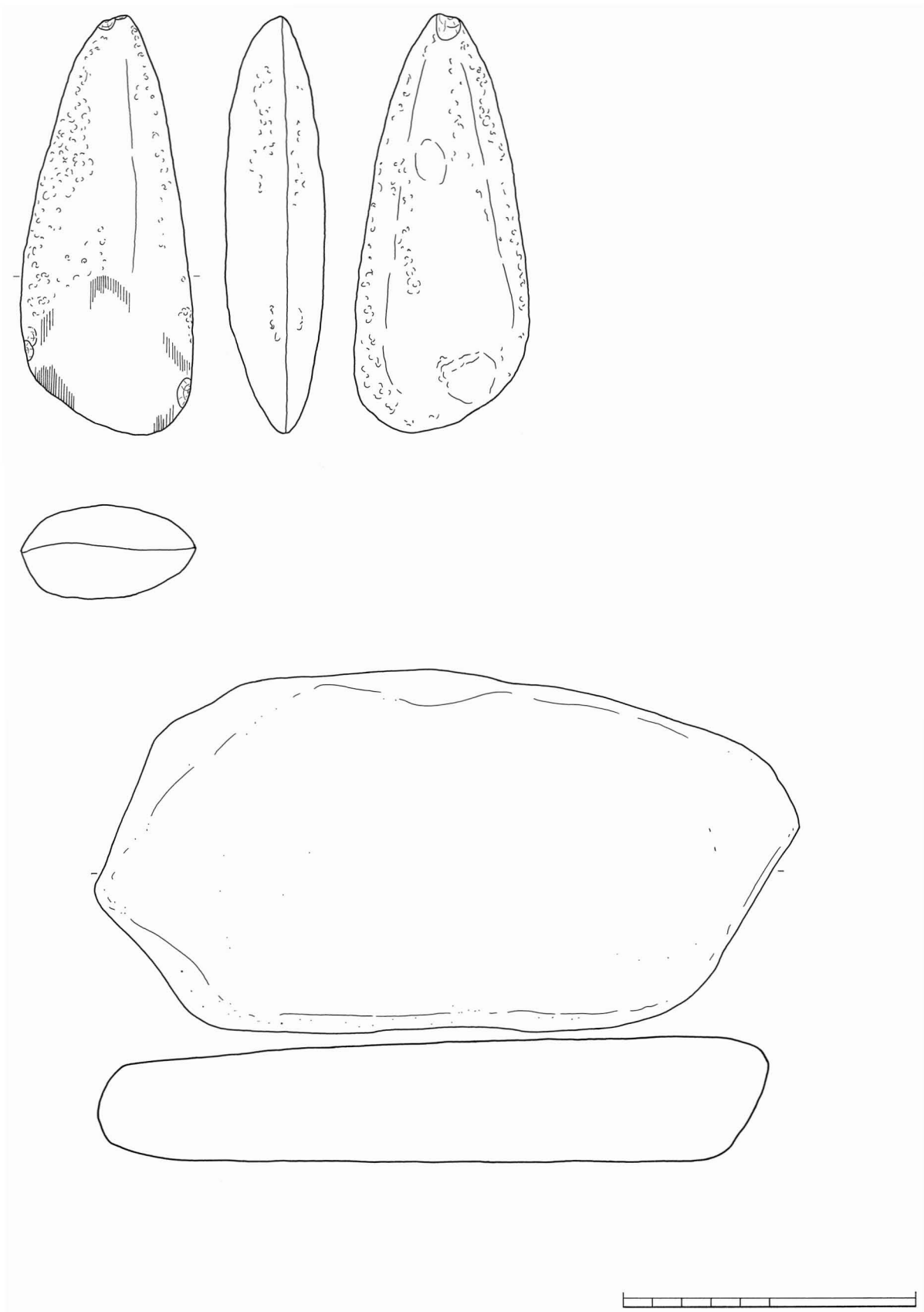
第24図 包含層出土石器実測図2 (S=1/2)



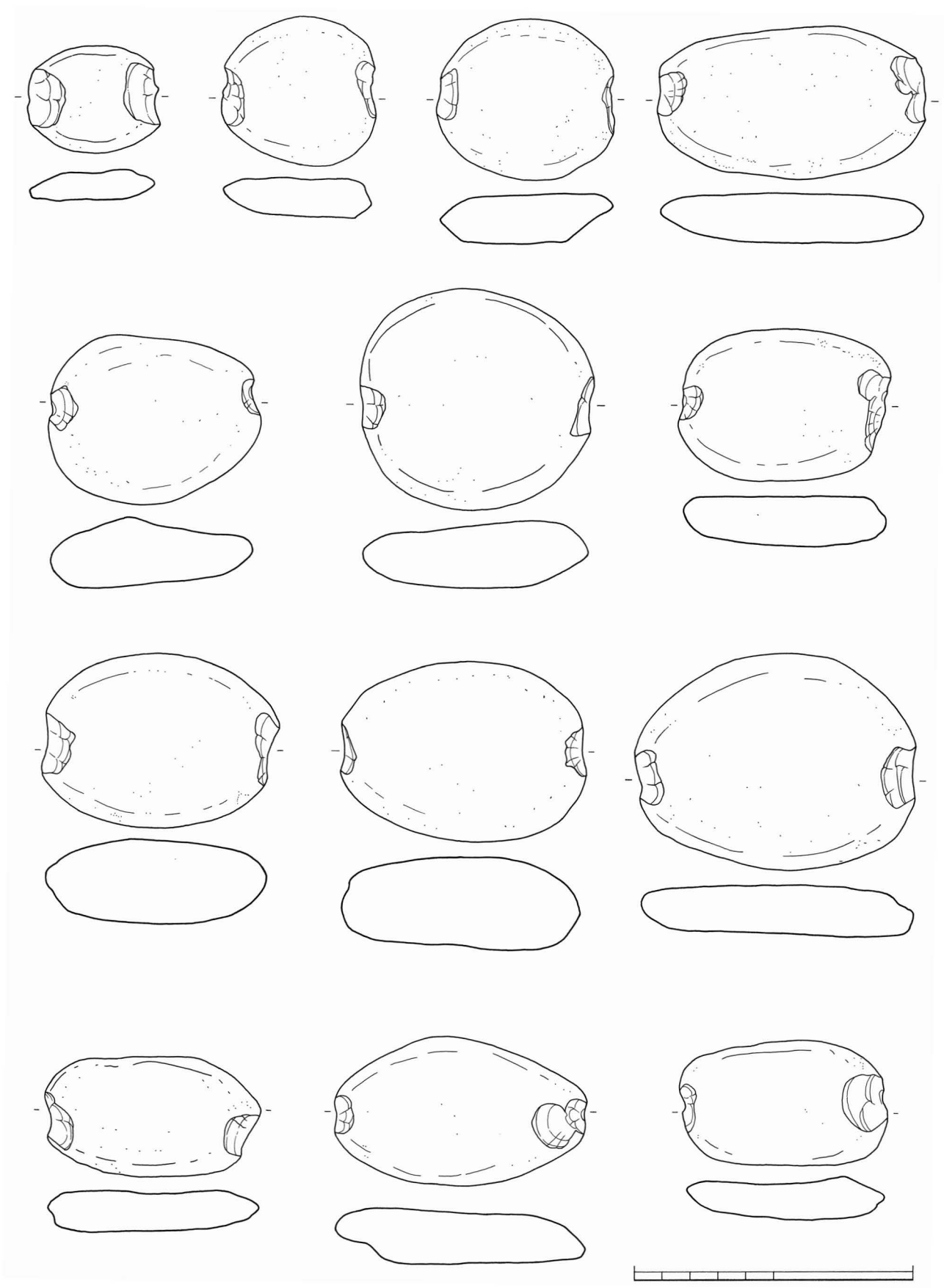
第25图 包含層出土石器实测图3 (S=1/2)



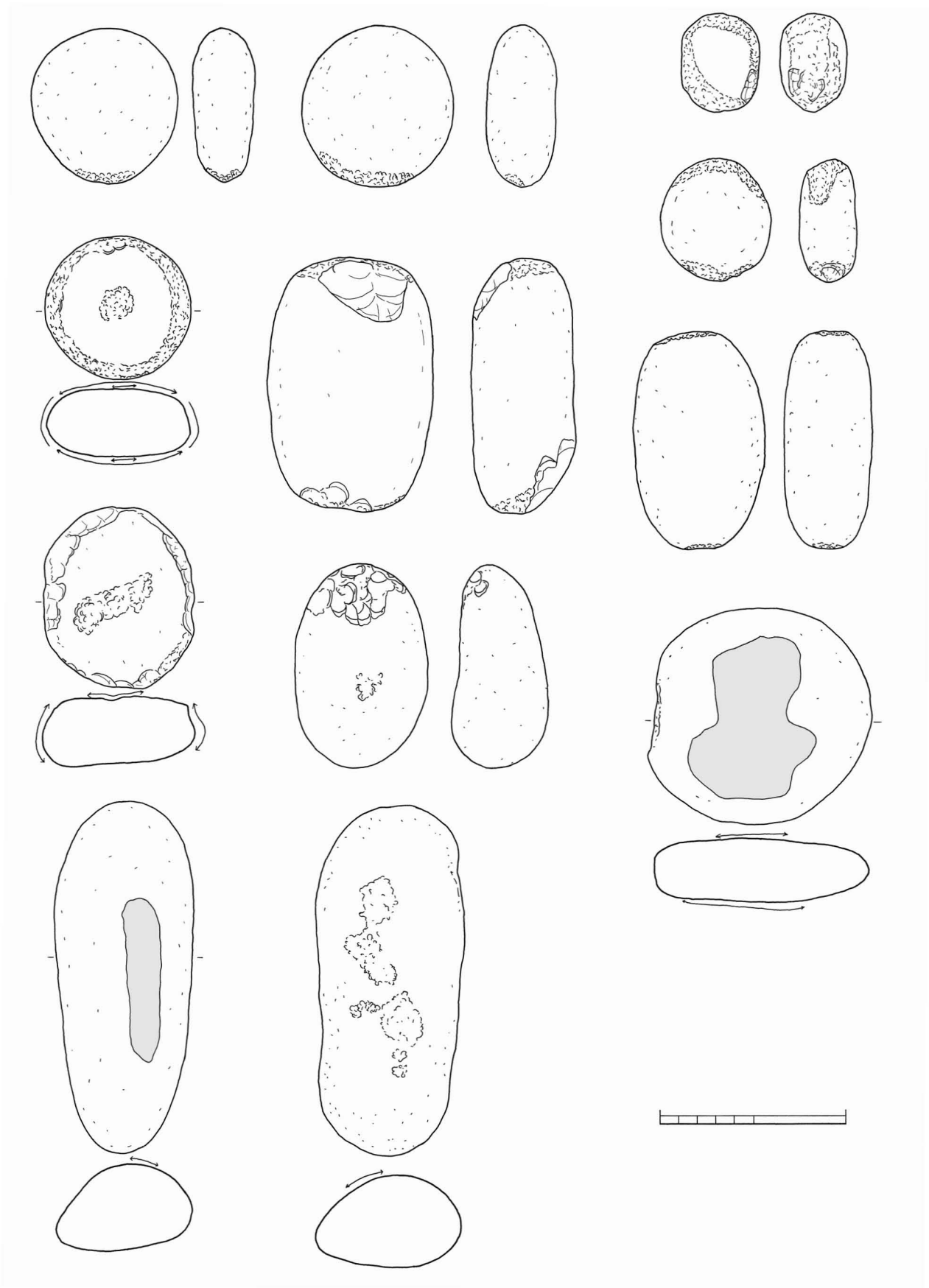
第26图 包含層出土石器实测图4 (S=1/2)



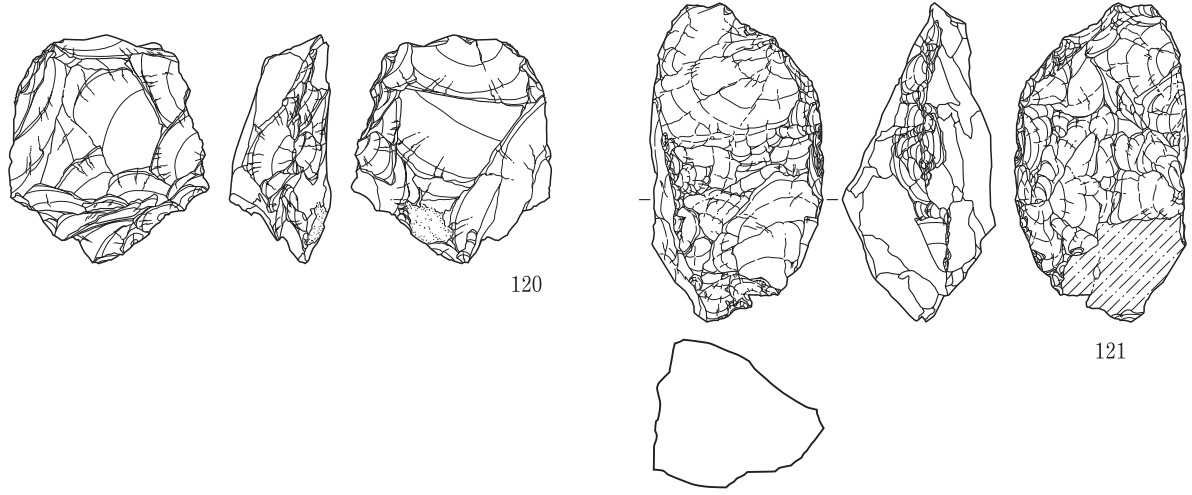
第27图 包含層出土石器実測図5 (S=1/2)



第28图 包含層出土石器実測図6 (S=1/2)

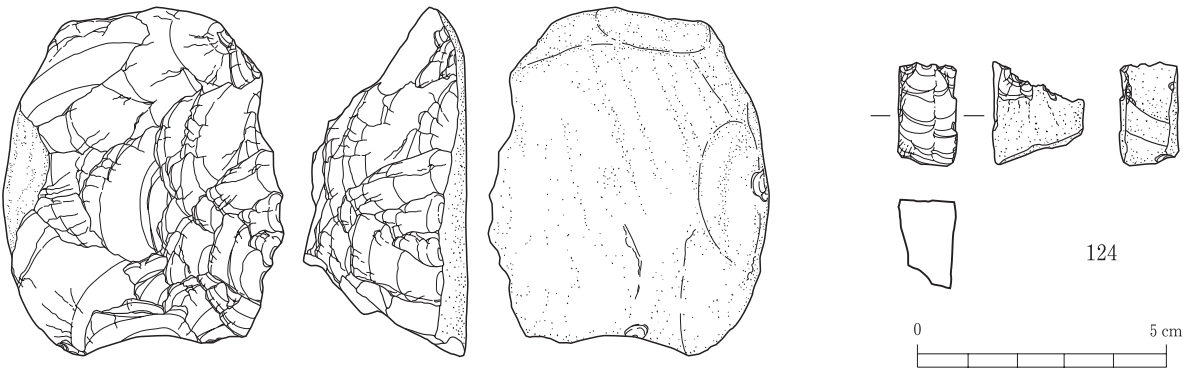


第29图 包含層出土石器实测图7 (S=1/3)



120

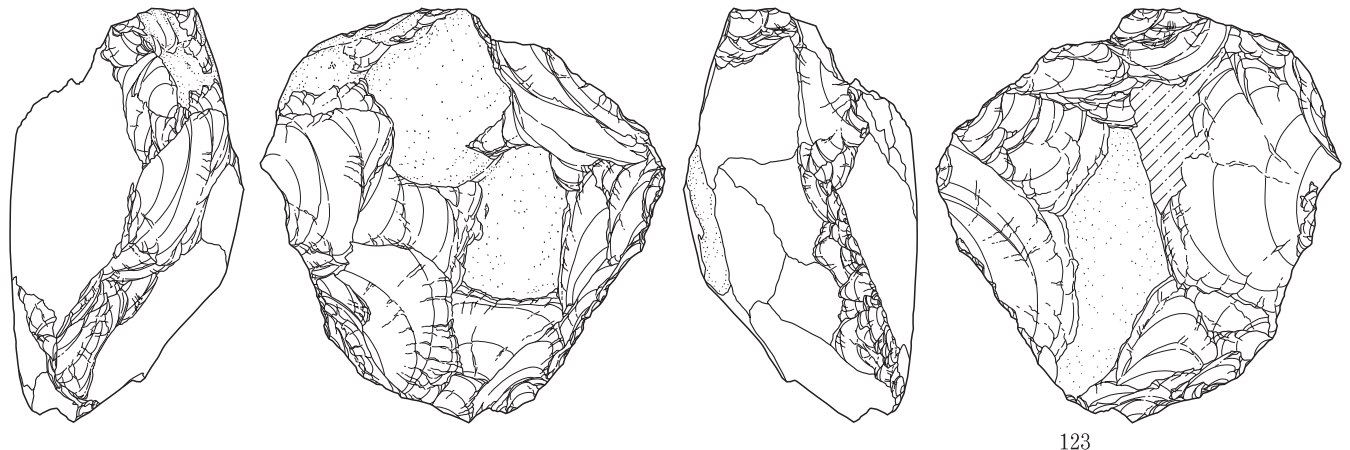
121



122

124

0 5 cm
S=2/3



123

0 10cm
S=1/2

第30図 包含層出土石器実測図8 (S=1/2、2/3)

第4節 古代の遺構と遺物

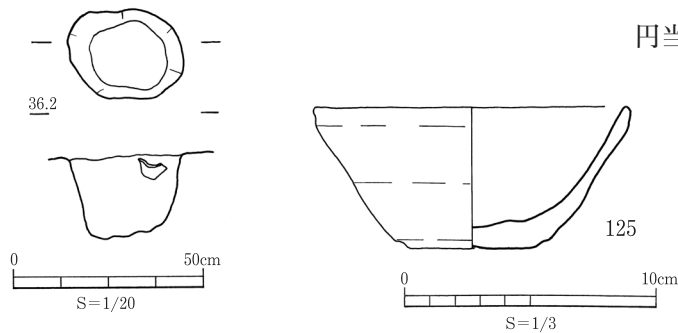
Ⅲ層からは古墳時代以降の遺物も出土した。どの時代にあたるかは明確ではないが、古代の土師器坏片や須恵器片が出土している。

遺構は ML1 上面で検出を行った結果、土師器坏を伴うピットを検出した。

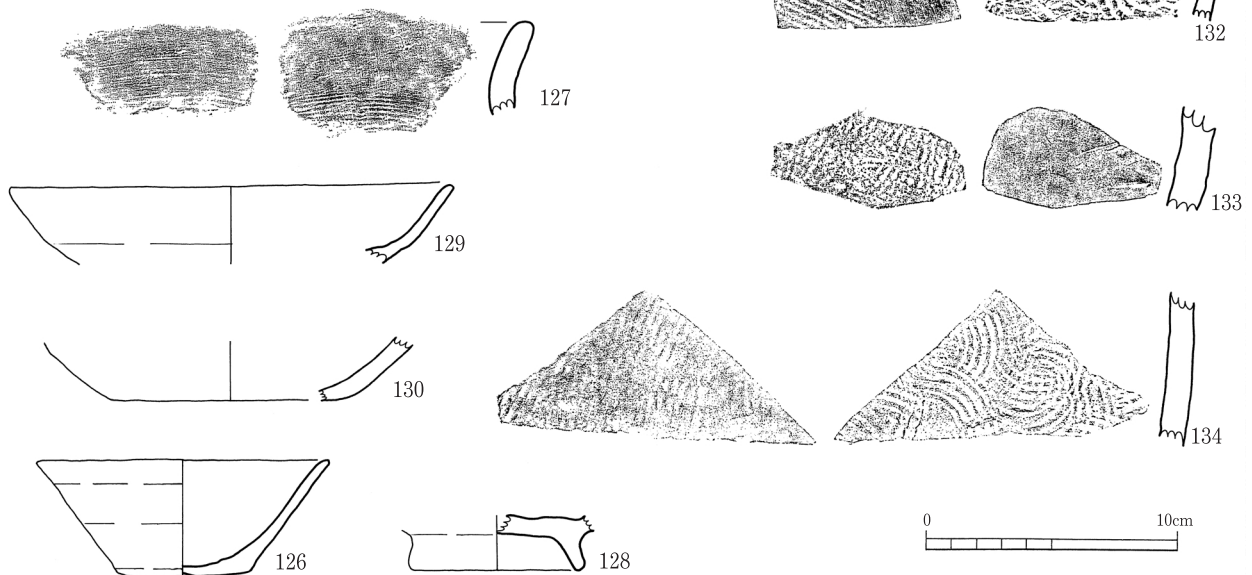
遺構

ピット (第31図)

I11グリッドからの検出となり、径は約 36cm、深さは約 23cm で、すぐ東側は削平を受けていた。埋土は黒褐色でしまりはなく単層で、埋土中より土師器が出土した。125は坏で底径が 5.6cm で内外面とも回転ナデが施され、底面はヘラ切りである。底部からやや膨らみを持って立ち上がり、口縁部は若干厚みを増し、わずかに外反する。



第31図 古代ピット及び出土遺物実測図



第32図 包含層出土土器実測図 (S = 1 / 3)

包含層出土遺物 (第32図 126~134)

126~130は土師器片である。126は坏で底径が 5.2cm で内外面共に回転ナデが施されている。底部からやや膨らみを持ちながら立ち上がり、口縁部は若干厚みを増してわずかに外反する。127は甕の口縁部で、大きく外反する。外面は回転ナデ、内面は回転ナデに工具痕が確認できた。129は坏の口縁部から胴部で口縁部はわずかに外反する。胴部はやや膨らみを持ち、胴部より口縁部にかけて厚さは徐々に薄くなる。128は壺の底部から高台で、高台は丸みを帯びて外反する。130は坏の底部でヘラ切りの後、ナデが施されている。

131~134は須恵器片で甕の胴部である。外面には格子目タタキが施されており、132はタタキ後横ナデが施されている。131・132・133は内面には同心円当具痕が見られ、133はナデが施されている。

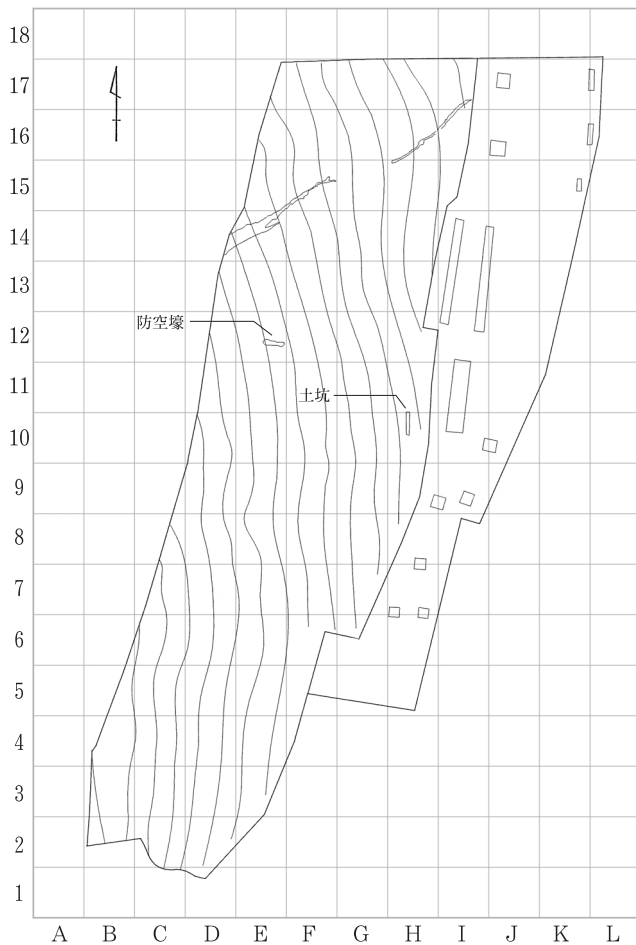
第5節 近現代の遺構と遺物

防空壕（図33 写真5・6）

重機でⅢ層上面まで掘削している際に、E12グリッドより人為的に掘られた堅穴が検出された。内部を確認すると約1.5m下がり、高さ・幅とも約1m、約3mの奥行きを持つL字状の空間を呈していた。天井・壁は素掘りで遺物等は伴っていなかったが、後日天井を開削し、高鍋町教育委員会職員の立ち会いの下、横穴式の防空壕と認定した。

土坑（図33）

H10グリッドよりⅢ層掘削中に検出した。長軸約3m、短軸約0.6mで埋土上層から多量のガラス瓶が出土したことから、駐屯していた旧日本軍が利用したゴミ穴の可能性があり、危険物が混入している恐れもあるため半截せずに位置のみ記録した。



第33図 防空壕・土坑位置図 (S = 1/1,500)

認識票（第34図）

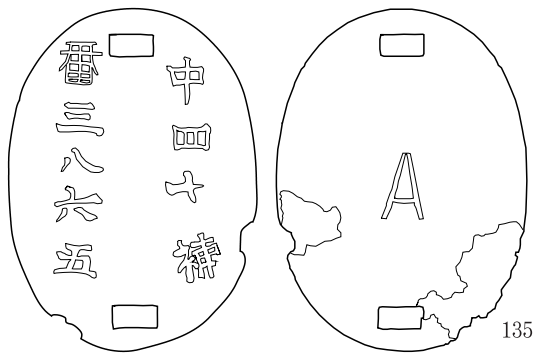
確認調査時に、F6グリッドより7枚出土した。全て長軸4.5cm、幅3.3cm、厚さ1mm、重量約3gの小判型で上下に紐穴が空いている。材質はアルミが主となる合金である。表には所属する中隊番号と兵籍番号が、裏にはアルファベットが打刻されていた。腐食が激しい141を除き6枚中5枚が「A」で140だけが「B」だった。腐食や損耗で不明瞭なものもあるが、全ての認識票に中隊番号の下に補充員を意味する「補」という字が打刻されている。



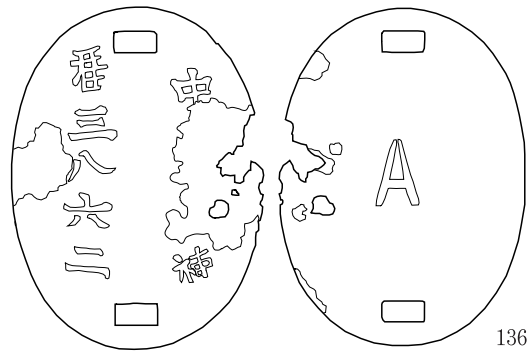
写真5 防空壕検出状況（東から）



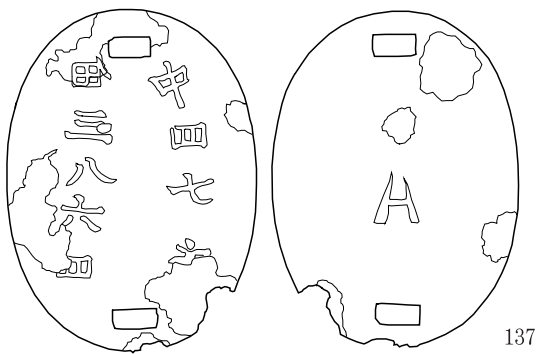
写真6 防空壕内部



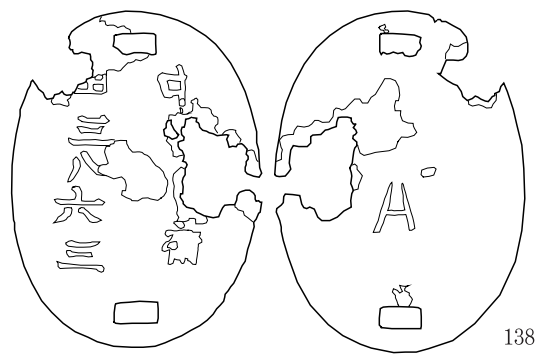
135



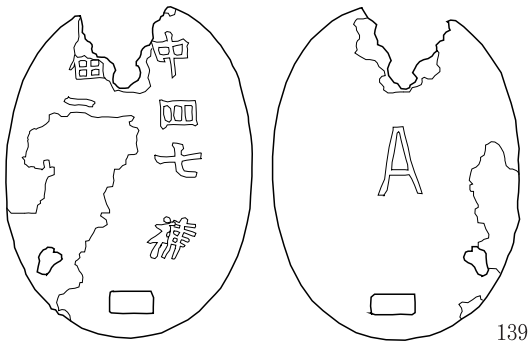
136



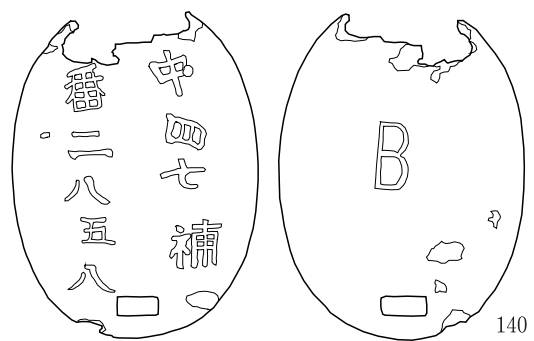
137



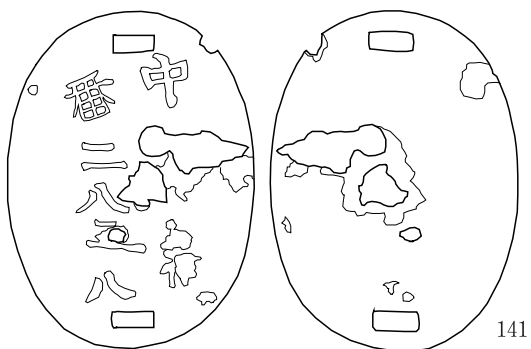
138



139



140



141



第34図 認識票実測図 (S=1/1)

第6節 その他の遺構

時期不明

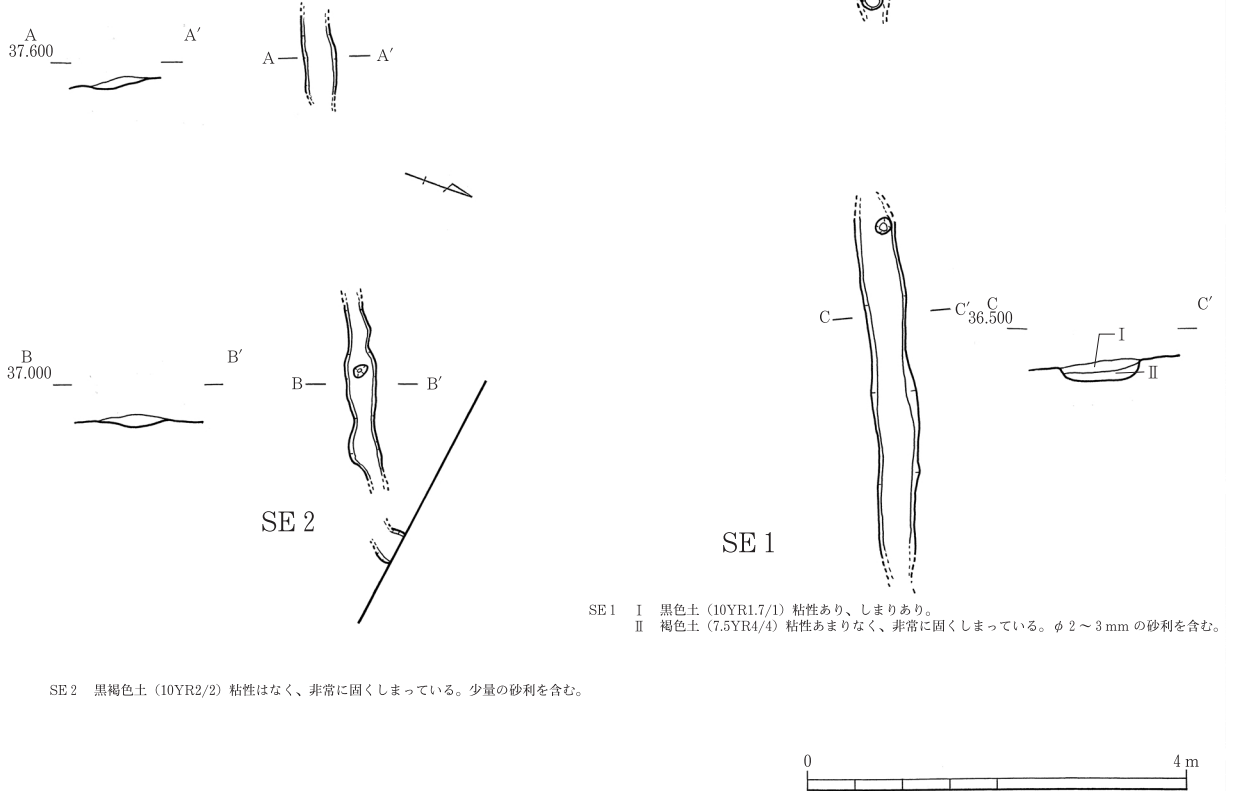
C区北端でML1上面で検出された溝状遺構が遺物を伴わなかったため時期不明とした。SE2は調査区北へ伸びているので、二次調査で続きが確認される可能性がある。

SE1 (第35図)

C区の礫集中区東から検出された。上部は削平を受けており下部のみの検出であったが、埋土は二層に分かれ、二層目が硬くしまっていた。幅約40cm、深さ約8cmである。

SE2 (第35図)

SE1の北側で検出された。上部が削平されており、ほぼ底面での検出となった。SE1のII層目と同じく、埋土は硬くしまっていた。幅約32cm、深さ約5cmである。



SE1 I 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性あり、しまりあり。
 II 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性あまりなく、非常に固くしまっている。φ 2~3mm の砂利を含む。

SE2 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性はなく、非常に固くしまっている。少量の砂利を含む。

第35図 SE1・2 実測図 (S=1/80) 断面実測図 (S=1/40)

第V章 まとめ

【旧石器時代】

トレンチ調査の結果でX層下部から石斧が1点出土したため、範囲を拡張し、トレンチを増やしたが、他には遺構・遺物は見られず、またVIa層下部からIX層においても遺構・遺物を確認することはなかった。チップ等も見られなかったため、他所からの持ち込んだものと判断した。南に位置する老瀬坂上第3遺跡で出土した当該期の石器・剥片等は、石材は流紋岩製がほとんどで、1のようなホルンフェルス製で10cm以上の大きさの石器は出土していないが、何らかの関連が想像できる。

【縄文時代】

A区とする調査区南半部にのみK-Ahが残存し、早期に該当する遺構・遺物が確認でき、B・C区にあたる調査区北半部では、K-Ah及びMB0の残存状態が悪く、遺物は後・晩期が主であることは前述の通りである。

A区でのみの検出となった集石遺構では、共伴する遺物がなかったため、具体的な時期の解明までは至らない。また土坑においても遺物・炭化物等が見られず明確な時期決定の判断材料にはならなかった。なお、A区ではK-Ah層上の残存が不良なため、後・晩期の遺物は乏しく南端では全く出土せず、遺構もA区では検出できなかった。

B・C区は、埋土の状況から早期に該当すると思われる土坑は2基検出されたが、明確に早期にあたる遺物は確認できず、遺構・遺物共に後・晩期が中心となった。包含層から磨消縄文がみられる46、孔列文土器や台付皿、黒川式と思われる精製の浅鉢等が出土しているが、まとまった数はなく、遺物の散布地としての性格が強い。SC11・12のような土坑からも三万田式の特徴をもつ土器片や磨消縄文をもつ土器片等が出土しているが、埋土中のものがほとんどで、流れ込んだものと判断した。

出土した打製石斧・磨製石斧は出土地点近くの他の遺物の様相から後・晩期に当たると判断した。ほとんどが破損品である。調査区内からは石核・剥片・敲石等の出土はあったものの、チップの出土数

は乏しいため生産・加工はあまり行わなかったのだろう。野首第2遺跡では未製品やチップ等、当該期の石斧の製作場的な様相が見られるため、本遺跡は主に消費の場であったと思われる。

当調査区からは弥生時代の遺構・遺物が確認できなかったため出土した石器は全て縄文時代の遺物として掲載したが、老瀬坂上第3遺跡や野首第2遺跡から少量ながら弥生土器片も確認されていることから、掲載した中にも弥生時代の石器が含まれている可能性がある。

圧痕が確認された60と61は、小畑弘己氏（熊本大学）と片多雅樹氏（福岡市埋蔵文化財センター）にレプリカ法による型取りと電子顕微鏡（福岡市埋蔵文化財センター所蔵）による観察していただいたところ、61の性格は風化を受けていたこともあり、不明であったが、60は山崎純男氏（福岡市教育委員会）が提唱するワクド石タイプに類似するとの教示を得た。包含層から明確な弥生土器が出土しなかったことや出土状況から、60は後・晩期にあると判断した。同町内に位置する唐木戸第4遺跡の、K-Ah層直上とクロボク層で行われた植物珪酸体・花粉分析では、メダケ属を主体としてイネ科植生が成立し、周辺にはカシ・ナラ・スギ・マツ等比較的種類に富む森林が分布していたという結果が出ている。今後、圧痕された種実の同定がされれば、高鍋町の古環境復元にさらに大きな助けとなるだろう。

【古代】

遺物の数が乏しいながらも、出土した土師器の坏の形状から9世紀後半の型式に相当し、南接する老瀬坂上第3遺跡の土坑内の炭化物を年代測定した結果とも合致する。遺物はいずれも流れ込みであろうが、周辺遺跡から出土する硯等から推測されている、丘陵上に居住していた富裕な階層に関連した遺物の可能性がある。

【近代】

『高鍋町史』によれば、第二次世界大戦時の高鍋町には陸軍が駐屯し、上江地区にも山小屋兵舎等の施

設が建設された。当時を知る地元の人に話を聞くと、現場付近に通信施設が建てられたそうである。防空壕はそういった施設に付随するものと考えられる。丘陵地帯には横穴式の防空壕が多く造られたようで、本遺跡のような台地の裾部を探せば、まだ残されている可能性は高い。認識票については、所属中隊番号は全て同じなので終戦後に廃棄されたものだろう。

【参考文献】

熊本県文化財調査報告書第114集

「ワクド石遺跡」1994

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第1集

「余り田遺跡」1997

金井安子 「防空壕」『しらべる戦争遺跡の事典』

柏書房 2002

菊池 実 「認識票」『しらべる戦争遺跡の事典』

柏書房 2002

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第86集

「野首第1遺跡」

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第94集

「東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅳ」2004

山崎純男 「土器匠痕からみた食と生業」『土器研究の新視点～弥

生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理～発表要旨』2005

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第111集

「東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅴ」2005

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第118集

「老瀬坂上第3遺跡」2005

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集

「下耳切第3遺跡」2006

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第126集

「唐木戸第4遺跡」2006

報告書 番号	出土地 点	出土層	種別	器種	部位	法量 (cm)		手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	注記番号	備考
						口径・底径		内面	外面	内面	外面			
2	SC11	II層	縄文土器	深鉢	口縁部			丁寧なナデ	沈線文、貼付突帯文、ナデ	にふい褐	にふい褐	1mm程度の褐色粒を多く含む、1mm以下の灰白色粒を含む	B SC11 372	
3	SC11	II層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ	ナデ	橙	にふい橙	1mm程度の灰色粒を含む	B SC11 355	
5	SC12	II層	縄文土器	深鉢	口縁部			籠状工具による横位ナデ	貝殻条痕文	にふい褐	にふい黄褐	1mm程度の黒・褐色粒を多く含む、2mm～4mm程度の褐色粒を少し含む	B SC12 383	
6	SC12	II層	縄文土器	深鉢	胴部			ナデ	ナデ、沈線文、磨消縄文	灰黄褐	黒褐	微細な褐・灰白色粒を多く含む、1mm程度の褐色粒を含む	B SC12 403	
7	SC12	II層	縄文土器	深鉢	胴～底部	推 9.2		籠状工具による斜位のナデ	ナデ	にふい橙	橙	1mm以下の褐色粒を多く含む、1mm以下の黒・灰色粒を少し含む	B SC12 353	
8	SC12	II層	縄文土器	深鉢	口縁～胴部			ナデ	ナデ	橙	褐灰	1mm以下の褐・灰白・透明光沢粒を多く含む、3mm以下の褐色粒を含む	B SC12 376	
9	SC17	II層	縄文土器	鉢	口縁部			横位ナデ(ミガキ?)	横位ナデ(ミガキ?)	浅黄	浅黄	1mm以下の黒褐色粒を多く含む、雲母をわずかに含む	C SC17 847	
10	SC17	I層	縄文土器	深鉢	口縁部			横ナデ	貼付突帯文、ナデ	橙	にふい褐	1mm程度の乳白色粒を多く含む、1mm以下の褐色・黒色光沢粒を含む	C SC17 847	
11	SC17	I層	縄文土器	深鉢	口縁部			籠状工具による横位ナデ	貼付突帯文、ナデ	にふい黄	にふい黄橙	1mm程度の灰・褐色粒を含む	C SC17 846	
12	SC17	I層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ 横ナデ	ナデ、貼付突帯文、貝殻条痕文	明黄褐	にふい黄橙	1mm程度の白色粒を含む	C SC17 742	
13	SC17	II層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ	貼付突帯文、ナデ	明黄褐	にふい黄橙	3mm以下の灰色・褐色粒を多く含む、1mm程度の黒色粒・透明光沢粒を含む	C SC17 744	
14	SC17	II層	縄文土器	深鉢	胴～底部	推 8.6		風化により不明瞭 ナデ	風化により不明瞭 ナデ	にふい黄	橙	1mm程度の灰色粒を多く含む、3mm以下の乳白色粒を多く含む、1mm以下の灰白色粒を含む	C SC17 744	
17	D 5	V層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ	貝殻条痕文	にふい黄橙	にふい黄橙	1mm程度の灰色粒を多く含む	A 17 V	
18	G11	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ	貼付突帯文、ナデ	橙	にふい橙	2mm程度の灰色粒を少し含む、1mm以下の黒色粒を少し含む、4mm以下の褐色粒を少し含む	C 807 V	
19	F11	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ	風化により不明瞭、貼付突帯文、貝殻条痕文	灰黄褐	褐灰	微細な乳白・黒色粒を含む	B 202 V	
20	G11	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			籠状工具による横位、ナデ	貼付突帯文、籠状工具による横位のナデ	にふい黄	にふい黄	1mm以下の黒・灰・乳白色の粒を多く含む	C 455 V	
21	G10	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			貝殻条痕文 ナデ	籠状工具による横位のナデ、貼付突帯文	にふい黄橙	にふい黄橙	1mm以下の灰白色粒を多く含む、1mm程度の褐色粒を含む	C 481 V	
22	G11	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			貝殻条痕文 ナデ	ナデ、貼付突帯文、貝殻条痕文	にふい黄褐	にふい赤褐	1mm程度の灰・黒色粒を多く含む、4mm以下の灰色粒を少し含む	C 804 V	
23	G12	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ	貼付突帯文、ナデ	にふい黄	にふい黄	3mm以下の灰白・黒褐色粒を多く含む	C 679 V	
24	G11	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ、貝殻条痕文	貼付突帯文、籠状工具による横位のナデ	橙	明黄褐	1mm程度の灰色粒を多く含む、3mm程度の灰・褐粒を多く含む	C 827 V	
25	G17	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ、貝殻条痕文	風化により不明瞭、貝殻条痕文、ナデ	明赤褐	明赤褐	1mm以下の灰白色粒・光沢粒を含む	B 287 V	
26	G11	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			籠状工具による横位のナデ	籠状工具による横位のナデ	暗灰黄	暗灰黄	3mm程度の灰色粒を含む、1mm以下の灰色粒を含む	C 453 V	
27	F 7	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ	ナデ、貝殻条痕文	にふい黄橙	にふい橙	1mm以下の褐色・黒色粒を少し含む	カクニン T 4-8	
28	E13	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			貝殻条痕文 ナデ	貼付突帯文、ナデ	橙	黄褐	1mm程度の褐色粒を多く含む、7mm以下の褐色粒を少し含む	カクニン T 1 III	
29	G10	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ	ナデ	にふい黄	にふい黄	1mm程度の灰・褐色粒をわずかに含む、	C 586 V	
30	I13	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ、貝殻条痕文	籠状工具による横位のナデ、貝殻条痕文	灰黄褐	褐灰	褐灰の微粒を多く含む、1mm以下の光沢粒・灰粒をわずかに含む	C 424 V	
31	H18	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	1mm以下の黒・乳白色粒を多く含む、1mm程度の灰色粒を多く含む	C 569 V	
32	G10	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ	沈線文、ナデ	にふい黄褐	にふい黄橙	1mm以下の黒・白色粒、黒色光沢柱状粒を含む	C 854 V	
33	G17	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ミガキ	口縁部に沈線、ミガキ	にふい黄褐	明赤褐	1mm程度の乳白色粒を多く含む、3mm以下の灰色粒をわずかに含む	B 278 V	
34	E12	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ	ナデ	橙	にふい黄橙	2mm以下の褐色粒を多く含む、2mm以下の灰白色粒を少し含む	B 220 V	
35	I18	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ	孔列文、貼付突帯文、ナデ	橙	橙	1mm以下の灰白・浅黄褐色粒を含む	C 544 V	
36	G11	III層	縄文土器	深鉢	口縁部			ナデ、貝殻条痕文	貼付突帯文、孔列文、ナデ	にふい黄橙	にふい黄橙	1mm以下の黒色粒を含む	カクニン T10 III	赤色顔料付着
37	G11	III層	縄文土器	鉢	口縁部			ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐	微細な乳白色粒を多く含む、1mm以下の褐色の粒をわずかに含む	C 439 V	
38	G11	III層	縄文土器	浅鉢	口縁部			ミガキ	ミガキ	にふい褐	にふい褐	6mm以下の浅黄褐色粒を含む、1mm以下の灰白・褐・黒色粒を含む	C 638 V	
39	G10	III層	縄文土器	浅鉢	口縁部			ミガキ	ミガキ	暗灰黄	にふい黄	1mm以下の白色光沢粒・褐色粒を含む	C 853 V	

第3表 縄文土器観察表1

報告書 番号	出土地 点	出土層	種別	器種	部位	法量 (cm)		手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	注記番号	備考
						口径・底径		内面	外面	内面	外面			
40	G11	Ⅲ層	縄文土器	浅鉢	胴部			ナデ	丁寧なナデ	暗灰黄	にぶい黄橙	1 mm 以下の褐色粒を少し含む、光沢粒を少し含む	C 681 V	
41	G11	Ⅲ層	縄文土器	浅鉢	頸~胴部			ミガキ	ミガキ	黄灰	暗灰黄	微細な白色粒・光沢粒を多く含む	C 697 V	
42	D11	Ⅲ層	縄文土器	皿	口縁部			ナデ、波状の貼付突帯文	ナデ	橙	にぶい黄橙	4 mm 以下の褐色粒を含む、1 mm 以下の灰白色粒を含む	B 143 V	
43	F 7	Ⅲ層	縄文土器	皿	口縁部			ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	微細な乳白色粒・光沢粒を多く含む、3 mm 以下の褐色粒をわずかに含む	カクニン T 4-8 16	
44	D11	Ⅲ層	縄文土器	皿	口縁部			櫛状工具による連続刺突文 (2条)、ナデ	ナデ	明黄褐	橙	1 mm 以下の黒・灰粒を少し含む、黒色光沢粒をわずかに含む	B 192 V	
45	G11	Ⅲ層	縄文土器	皿	脚部			ナデ	ナデ	橙	橙	3 mm 以下の褐色粒を多く含む、1 mm 以下の灰色粒を多く含む	C 500 V	
46	D12	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	胴部			ナデ	磨消縄文・沈線文、ナデ	橙	明赤褐	1 mm 程度の白・灰色粒を多く含む、微細な乳白色粒を多く含む、黒色の光沢粒を少し含む	B 391 V	
47	D10	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	胴部			籠状工具による横位ナデ	ナデ	灰黄褐	橙	2 mm 以下の褐色粒を含む、5 mm 程度の灰白色粒を含む	C 734 V	
48	G11	V層	縄文土器	深鉢	胴部			ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい橙	4 mm 以下の褐色粒を多く含む、1 mm 以下の白色粒をわずかに含む	B 71 V	
49	G17	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	胴部			ナデ、貝殻条痕文	ナデ、貝殻条痕文	赤褐	にぶい赤褐	2 mm 以下の褐・橙色粒を含む	B 81 V	
50	G11	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	頸部			ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	1 mm 以下の乳白色粒・透明光沢粒を含む	B 269 V	
51	D11	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	底部	8.8		ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	2 mm 以下の乳白色粒・透明光沢粒を含む	カクニン T10 Ⅲ	
52	H18	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	底部	推8.4		ナデ	ナデ	にぶい黄褐	橙	1 mm 以下の黒・褐色粒を多く含む、1 mm 程度の灰褐色粒を少し含む	B 432 V	
53	D12	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	底部	推8.0		ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	6 mm 以下の乳白色粒を少し含む、1 mm 以下の黒・褐・白色粒を多く含む、1 mm 以下の黒色光沢粒を少し含む	C 571 V	
54	E 6	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	底部	推10.0		風化により不明瞭ナデ	風化により不明瞭	橙	黄褐	2 mm 以下の褐色粒を多く含む、5~7 mm の褐色粒をわずかに含む、3 mm 以下の褐色粒をわずかに含む	A 67 Ⅲ	葉脈痕 有り
55	G17	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	底部	推7.6		ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	1 mm 以下の乳白色粒を含む、2 mm 以下の褐色粒をわずかに含む	B 166 V	
56	G11	Ⅲ層	土師器	碗	底部			ナデ	ナデ	橙	橙	1 mm 以下の灰・白・褐色粒をわずかに含む	B 318 V	
57	G11	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	口縁部			貝殻条痕文 ナデ	ナデ、貼付突帯文、貝殻条痕文	にぶい黄褐	にぶい赤褐	1 mm 程度の灰・褐色粒を多く含む、4 mm 以下の灰色粒を少し含む	カクニン T 1 Ⅲ	
58	H18	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	胴部			貝殻条痕文、 ナデ	貝殻条痕文、 ナデ	橙	橙	3 mm 程度の灰白色粒を含む、1 mm 以下の灰白・褐色粒を含む	C 804 V	
59	G10	Ⅲ層	縄文土器	浅鉢	口縁~底部	口径推33.0 底径12.1		籠状工具による横位ナデ	ナデ	にぶい黄褐	橙	1 mm 程度の灰色粒を多く含む、4 mm 以下の灰・褐色粒を少し含む	C 665 V	
60	G10	Ⅲ層	縄文土器	浅鉢	口縁部			横位のナデ、 沈線	ナデ	にぶい橙	黒	1 mm 以下の白色粒を多く含む、4 mm 以下の灰色粒を少し含む	C 614 V	圧痕有
61	G17	Ⅲ層	縄文土器	深鉢	底部	推10.1		ナデ	ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	2 mm 以下の赤褐色粒を多く含む、黒色の微粒を少し含む	B 321 V	圧痕有

第4表 縄文土器観察表2

報告書 番号	出土地 点	出土層	種別	器種	部位	法量 (cm)		手法・調整・文様等		色調		胎土の特徴	注記番号	備考
						口径・底径		内面	外面	内面	外面			
125	SH 1	I層	土師器	碗	口縁~底部	口径推12.5 底径5.6		回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	2 mm 程度の灰色粒をわずかに含む、1 mm 程度の光沢粒をわずかに含む	C 491 V	
126	I11	Ⅲ層	土師器	碗	口縁~底部	5.2		回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	3 mm 以下の暗赤灰色粒を多く含む、微細な灰白色・光沢粒をわずかに含む	C 492 V	
127	J16	Ⅲ層	土師器	甕	口縁部			回転ナデ	回転ナデ	橙	橙	微細な黒色粒を多く含む、1 mm 程度の黒・褐色粒をわずかに含む	カクニン T10	
128	J17	Ⅲ層	土師器	坏	口縁~底部			横ナデ	ナデ	橙	橙	1 mm 以下の褐・灰色粒を多く含む、2 mm 程度の褐色粒をわずかに含む	カクニン T10	
129	J18	Ⅲ層	土師器	皿	胴~底部	推9.2		ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1 mm 程度の褐色粒をわずかに含む	カクニン T10 Ⅲ	
130	J19	Ⅲ層	土師器	碗	底部			ナデ	ナデ	橙	橙	1 mm 以下の灰・黒色の微粒を多く含む、2 mm 以下の灰粒を少し含む	カクニン T10 Ⅲ	
131	J20	Ⅲ層	須恵器	甕	胴部			同心円当具痕	格子目タタキ	灰黄	灰黄	1 mm 以下の灰白色粒を含む	カクニン T10 Ⅲ	
132	J21	Ⅲ層	須恵器	甕	胴部			同心円当具痕	格子目タタキ 後回転ナデ	灰	灰	1 mm 以下の黒・茶色粒を含む	カクニン T10	
133	D13	Ⅲ層	須恵器	甕	胴部			同心円当具痕	風化により不明瞭 だが格子目タタキ	灰黄	灰黄	1 mm 以下の灰白色粒を含む	カクニン T14 Ⅲ 106	
134	J12	Ⅲ層	須恵器	甕	胴部			指頭痕、ナデ	格子目タタキ	暗灰黄	にぶい黄橙	1 mm 以下の灰白色粒を含む	カクニン T1 Ⅲ	

第5表 古代土器観察表

図面番号	器種	出土地点		法量				石材	注記番号	備考
		グリッド	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)			
1	打製石斧	F7	X	15.2	11.5	4.8	1027.0	ホルンフェルス	A 66 VIII	
4	敲石	SC11	IV	9.9	8.8	7.4	837.8	砂岩	B SC11 385	
15	打製石斧	SC17	II	9.9	6.1	1.5	67.2	ホルンフェルス	C SC17 743	
16	打製石斧	SC17	II	7.6	5.0	2.2	70.7	ホルンフェルス	C SC17 846	
62	石鏃	G12	III	1.2	0.8	0.2	0.3	黒曜石	B 210 V	
63	石鏃	D6	VIa	1.7	1.4	0.3	0.4	黒曜石	A 40 VIa	
64	石鏃	G9	VIa	2.3	2.1	0.3	0.7	黒曜石(姫島)	A 851 VIa	
65	石鏃	D7	VIa	2.3	1.6	0.3	0.5	チャート	A 54 VIa	
66	石鏃	F13	III	2.3	2.0	0.3	1.1	チャート	B 345 V	
67	石鏃	C4	VIa	1.9	1.5	0.2	0.5	チャート	A 15 VIa	
68	石鏃	E16	III	2.2	1.5	0.4	1.2	チャート	B 172 V	
69	石鏃	C6	VIa	2.0	1.3	0.2	0.5	ホルンフェルス	A 46 VIa	
70	石鏃	E13	III	2.5	1.5	0.2	0.2	玉髄	B 214 V	
71	スクレイパー	G17	III	8.3	4.1	0.7	54.2	ホルンフェルス	B 328 V	
72	スクレイパー	E13	III	8.1	6.6	2.3	162.4	砂岩	カクニNT1 III	
73	礫器	D2	VIa	9.4	9.2	4.8	325.6	ホルンフェルス	A 6 VIa	
74	礫器	F10	VIa	10.1	9.4	3.3	350.4	ホルンフェルス	カクニN 46	
75	打製石斧	E11	III	12.8	5.1	2.9	178.0	ホルンフェルス	B 422 V	
76	打製石斧	G11	III	14.1	4.6	2.0	113.2	ホルンフェルス	C 806 V	
77	打製石斧	E16	III	12.3	5.4	2.0	122.5	ホルンフェルス	B 226 V	
78	打製石斧	G13	III	10.0	5.5	2.0	120.0	ホルンフェルス	B 347 V	
79	打製石斧	G10	III	9.8	6.0	1.6	57.6	ホルンフェルス	C 582 V	
80	打製石斧	G17	III	8.0	6.5	2.8	145.4	ホルンフェルス	B 282 V	
81	打製石斧	D17	III	6.9	4.8	1.9	55.5	ホルンフェルス	B 230 V	
82	打製石斧	G11	III	7.1	5.1	2.4	88.9	ホルンフェルス	C 521 V	
83	打製石斧	D12	III	14.5	8.2	2.5	200.0	ホルンフェルス	B 122 V	
84	打製石斧	G11	III	7.9	4.5	1.7	47.1	ホルンフェルス	B 75 V	
85	打製石斧	G11	III	10.6	5.1	1.8	72.1	ホルンフェルス	C 441 V	
86	打製石斧	G11	III	11.3	5.4	2.6	137.3	ホルンフェルス	C 498 V	
87	打製石斧	G17	III	10.8	6.9	2.5	180.7	ホルンフェルス	B 296 V	
88	打製石斧	I15	III	9.4	6.0	2.1	111.0	ホルンフェルス	C 536 V	
89	打製石斧	G11	III	10.9	5.8	1.9	130.5	ホルンフェルス	C 454 V	
90	打製石斧	H11	III	9.2	7.2	3.5	216.8	ホルンフェルス	B 201 V	
91	磨製石斧	I15	III	7.8	4.9	0.8	51.8	ホルンフェルス	カクニNT10 III	
92	磨製石斧	E16	III	12.3	6.1	4.3	317.1	ホルンフェルス	B 225 V	
93	磨製石斧	D11	III	14.4	6.2	3.9	347.1	ホルンフェルス	B 115 V	
94	台石	C5	V	18.8	36.1	6.6	5443.4	尾鈴山酸性岩類	A 58 V	
95	石錘	F17	III	4.8	4.1	1.3	32.7	砂岩	B 272 V	
96	石錘	H16	III	5.6	5.4	1.7	68.4	砂岩	C 566 V	
97	石錘	G17	III	6.4	5.8	1.8	102.7	砂岩	B 266 V	
98	石錘	F17	III	9.6	5.6	2.0	150.1	砂岩	B 271 V	
99	石錘	H17	III	7.6	6.2	2.6	150.1	砂岩	C 563 V	
100	石錘	D11	III	8.5	8.0	2.1	216.4	砂岩	B 103 V	
101	石錘	G11	III	7.6	5.7	2.0	127.6	砂岩	C 511 V	
102	石錘	F14	III	8.5	6.5	3.3	244.5	砂岩	B 350 V	
103	石錘	F15	III	8.2	6.3	3.7	273.6	砂岩	B 409 V	
104	石錘	I17	III	10.1	8.0	2.0	229.6	砂岩	C 722 V	
105	石錘	I16	III	7.7	4.4	1.8	76.2	ホルンフェルス	C 540 V	
106	石錘	F17	III	9.1	5.6	2.2	125.7	ホルンフェルス	B 261 V	
107	石錘	D12	III	7.4	4.8	1.5	77.9	ホルンフェルス	B 121 V	
108	敲石	H10	III	8.3	7.8	3.3	326.2	尾鈴山酸性岩類	C 620 V	
109	敲石	G10	III	8.7	8.2	3.8	394.7	尾鈴山酸性岩類	表採	
110	敲石	G10	III	5.3	4.2	3.6	121.6	尾鈴山酸性岩類	表採	
111	敲石	G11	III	6.6	5.9	3.1	179.6	尾鈴山酸性岩類	C 748 V	
112	敲石	D11	III	7.7	7.7	3.7	323.6	尾鈴山酸性岩類	B 118 V	
113	敲石	E17	III	13.6	8.9	5.6	1046.7	尾鈴山酸性岩類	B 232 V	
114	敲石	F13	III	11.4	7.3	4.9	608.0	尾鈴山酸性岩類	B 360 V	
115	敲石	F17	III	9.7	8.1	3.7	433.1	砂岩	B 256 V	
116	敲石	H11	III	10.9	7.0	5.2	505.8	砂岩	C 522 V	
117	磨石	D5	V	11.6	12.0	3.4	714.4	砂岩	A 28 V	
118	磨石	C5	VIa	18.9	7.5	4.7	934.2	砂岩	A 29 VIa	
119	磨石	E16	III	18.6	8.0	4.9	1102.6	砂岩	B 228 V	
120	石核	D5	VIa	5.6	5.4	2.5	83.2	ホルンフェルス	A 8 V	
121	石核	G11	III	8.2	4.7	3.9	144.6	チャート	B 495 V	
122	石核	F13	V	9.1	7.7	4.9	312.3	ホルンフェルス	B 389 V	
123	石核	I15	III	12.9	11.3	7.5	942.3	ホルンフェルス	C 818 V	
124	細刃石核	F13	III	1.5	1.3	1.1	1.8	黒曜石(桑ノ木津留)	B 404 V	

第6表 旧石器時代・縄文時代石器計測表1

図面番号	器種	出土地点		法量				石材	注記番号	備考
		グリッド	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)			
	打製石斧	G10	Ⅲ	7.2	5.6	1.5	46.5	ホルンフェルス	カクニNT1Ⅲ	
	打製石斧	G10	Ⅲ	8.4	4.4	1.4	50.9	ホルンフェルス	カクニNT1Ⅲ	
	打製石斧	G10	Ⅲ	12.3	6.8	2.6	186.4	ホルンフェルス	カクニNT1Ⅲ	
	打製石斧	G11	Ⅲ	9.2	7.2	3.5	216.8	ホルンフェルス	B 206 V	
	打製石斧	G11	Ⅲ	12.0	5.2	2.0	99.5	ホルンフェルス	B 362 V	
	打製石斧	G11	Ⅲ	7.5	3.6	1.5	30.4	ホルンフェルス	C 515 V	
	打製石斧	F10	Ⅲ	14.1	4.6	2.0	113.2	ホルンフェルス	C 806 V	
	打製石斧	H13	Ⅲ	8.8	6.4	2.1	112.6	ホルンフェルス	B 102 V	
	打製石斧	H13	Ⅲ	7.3	6.3	2.0	97.5	ホルンフェルス	B 700 V	
	敲石	E7	Ⅵa	12.7	8.5	4.2	668.4	砂岩		
	敲石	A	Ⅵa	15.2	11.5	4.8	1027.0	砂岩		
	敲石	E12	Ⅲ	11.7	6.5	4.5	451.2	尾鈴山酸性岩類	B 215 V	
	敲石	E15	Ⅲ	11.3	5.5	4.5	329.4	尾鈴山酸性岩類	B 221 V	
	敲石	F17	Ⅲ	18.3	9.0	6.3	889.2	砂岩	B 240 V	
	敲石	F17	Ⅲ	11.6	8.9	6.5	722.3	砂岩	B 249 V	
	敲石	G17	Ⅲ	7.2	6.7	4.8	242.7	砂岩	B 285 V	
	敲石	G17	Ⅲ	12.9	7.9	6.6	900.5	尾鈴山酸性岩類	B 322 V	
	敲石	G17	Ⅲ	14.8	6.9	4.5	438.4	砂岩	B 326 V	
	敲石	G17	Ⅲ	10.1	6.4	4.3	342.9	砂岩	B 335 V	
	敲石	F15	Ⅲ	10.4	10.3	6.9	918.7	尾鈴山酸性岩類	B 346 V	
	敲石	F16	Ⅲ	7.1	7.0	6.0	336.7	尾鈴山酸性岩類	B 380 V	
	敲石	E13	Ⅲ	8.5	8.2	6.9	536.2	尾鈴山酸性岩類	B 388 V	
	敲石	G10	Ⅲ	6.0	5.1	4.5	159.6	砂岩	C 514 V	
	敲石	H17	Ⅲ	6.4	5.2	4.0	138.8	砂岩	C 548 V	
	敲石	G13	Ⅲ	7.3	6.2	4.3	193.3	砂岩	C 704 V	
	敲石	H14	Ⅲ	8.4	6.0	5.8	277.8	ホルンフェルス	C 714 V	
	敲石	G15	Ⅲ	12.8	6.8	4.0	413.9	砂岩	C 812 V	
	敲石	E10	Ⅲ	7.2	5.8	2.4	96.4	砂岩		
	敲石	D12	Ⅲ	6.8	6.4	5.7	297.8	ホルンフェルス		
	磨石	C4	V	10.3	10.2	3.2	344.3	砂岩	A 156 V	
	磨石	G17	Ⅲ	4.5	4.4	4.0	92.8	砂岩	B 312 V	
	磨石	F17	Ⅲ	5.4	4.5	4.1	123.5	ホルンフェルス	B 242 V	
	磨石	F17	Ⅲ	7.5	7.5	6.0	394.1	砂岩	B 237 V	
	磨石	E12	Ⅲ	6.1	5.9	4.6	197.5	尾鈴山酸性岩類	B 386 V	
	石錘	D5	Ⅲ	7.1	5.9	1.7	104.0	砂岩	A 30Ⅲ	
	石錘	E6	Ⅲ	6.3	5.7	1.3	70.2	ホルンフェルス	A 36Ⅲ	
	石錘	D6	Ⅲ	7.4	6.6	2.1	136.6	砂岩	A 37Ⅲ	
	石錘	D11	Ⅲ	5.0	4.7	2.0	50.7	砂岩	B 87 V	
	石錘	E15	Ⅲ	7.7	4.9	1.5	60.4	ホルンフェルス	B 171 V	
	石錘	F17	Ⅲ	7.4	5.8	1.4	57.9	ホルンフェルス	B 262 V	
	石錘	G17	Ⅲ	7.3	6.0	1.7	87.2	ホルンフェルス	B 311 V	
	石錘	G18	Ⅲ	7.4	6.3	1.9	105.6	ホルンフェルス	B 320 V	
	石錘	D11	Ⅲ	7.6	5.7	2.7	112.3	ホルンフェルス	B 416 V	
	石錘	E15	Ⅲ	7.3	4.4	2.5	101.0	ホルンフェルス	B 224 V	
	石錘	G17	Ⅲ	7.7	7.0	1.7	124.2	砂岩	B 297 V	
	石錘	H18	Ⅲ	7.5	5.1	2.5	92.3	ホルンフェルス	C 731 V	
	石錘	H17	Ⅲ	8.0	6.5	3.6	238.9	砂岩	C 738 V	
	石錘	H17	Ⅲ	5.6	5.1	1.4	53.5	砂岩	C 739 V	

第7表 旧石器時代・縄文時代石器計測表2



調査区を南から撮影



調査区俯瞰